

劇団青年座第197回公演

齋藤雅文 作

宮田慶子 演出

千里眼の女

●登場人物

福来友吉 ふくらいともきち

四十二歳。東京帝大文学大学（今の文学部）助教授。心理学博士。高山の呉服商に生まれ、奉公先を転々。苦学して催眠術研究の第一人者となる。

橘 四郎

三十五歳。ゴシップや三面記事で売る、いわゆる赤新聞「万朝報」よろずちようほうを出している朝報社の記者。東京の職人の家に生まれる。東京専門学校中退。

山川健次郎

五十六歳。日本物理学の泰斗。東京帝大総長。日本で初めてレントゲンを実験。「公正と正義」の教育者。会津藩白虎隊の生き残りで、苦難の末エール大学を卒業。日本教育界の頂点に立つ。

今村新吉

三十六歳。京都帝大医科大学（医学部）教授。金沢の出。父は後の一高校長。三年のドイツ留学を経た、精神病学会のエリート。

御船秀益 みふねひでます

六十一歳。熊本の士族。宇土郡松合村まつあひで漢方医を開業。田舎の名士。

清原猛雄

三十七歳。御船千鶴子の姉の夫。地元中学の体育教師。地方の催眠術研究者。

藤教篤 三十五歳。東京帝大の物理学講師。丸亀の念写実験で「仕掛け」を作る。

御船千鶴子 二十四歳。秀益の次女。軍人の許へ嫁すが離縁。父の医療を手伝う。義兄清原の指導で

「千里眼」となる。右耳が難聴。

長尾郁子 三十九歳。徳山藩家老の末。毛利子爵家の住み込みの家令の子として、厳しく躰けられる。夫は判事。

松乃 五十五歳。御船家の女中。千鶴子の乳母のような存在。

田中館愛橘たなかだてあいきつ 五十四歳。物理学者。

呉秀三くれしゅうぞう 四十五歳。医学者。

姉崎正治 三十七歳。宗教学者。

丘浅次郎 四十二歳。物理学者。

長尾与吉 四十八歳。郁子の夫。判事。

新聞記者 A

同 B

●時と場所

第一幕

第一景 東京、本郷。東京帝国大学。福来の研究室。（大正二年（一九一三）十月十九日。雨の午後。）

第二景 京都、麩屋町。旅館俵屋の二階座敷。（三年前の明治四十三年九月五日。晴れた午後。）

第三景 東京、麹町。大橋邸の洋間。（九月十四日。昼前。晴天。）

第四景 再び、福来の研究室。（第一景のしばらく後。）

第二幕

第五景 熊本、松合村^{まつあひ}。御船家、千鶴子の部屋。（同年十一月十七日。小春日和の夕。）

第六景 丸亀。長尾家の座敷。（翌る明治四十四年一月八日。午前。晴天。）

第七景 再び熊本。千鶴子の部屋。（一月十七日。満月の夜。）

第八景 三度、福来の研究室。（第四景のしばらく後。暮れ方。）

第一幕

第一景 東京、本郷。東京帝国大学。福来の研究室。

スライド「大正二年（一九一三）十月十九日。午後。

東京帝国大学。福来助教授の研究室。」

正面に福来の大いなる机があるばかりで、本棚などはほとんど空。本を束ねたものや文房具などをまとめた荷が、乱雑に置かれている。

福来が助教授を免官になり、退去する当日。

腕まくりをした福来が黙々と荷造りをしている。正面の窓の向こうは、陰鬱な雨模様。

ノックとともに、下手の扉より朝報社の橘が顔を出す。

橘
（部屋を見渡し）へえ……。

福来
（少し驚き）……やあ、どうしました？（思い至り）ああ、城明け渡しの取材

ですか。

橘 とんでもない。(下げていた一升瓶を見せ)別盃を願おうと思ひまして。いや、

我が「万朝報」新聞一同より、福来先生の門出を祝して、と言うべきかな。

福来 (微笑して、荷造りを続ける)ここは神聖な研究室だよ。

橘 いいえ。研究室「だった」ところですよ。今まさに、催眠研究の第一人者たる

主を失なわんとしているこの部屋は、氣息奄々、いつそ寥たる^{りよう}柩に見える。

研究室の成れの果て。ここは、この大学と共に、学究精神の墓場となるのでしよう。

福来 それは、私を慰めてくれているのかね？

橘 (ひとなつっこく)先生のために惜しむんですよお。もつたいないなあ、実にもつたいない。山川総長には失望しました。

福来 山川さんが私に休職命令を出した訳じゃないよ。

橘 あなたがそんなにお人よしだから、理科や医学の馬鹿教授共が付け上がるんです。休職令？実際は免官じゃないですか。追放ですよ。……これが「教員淘汰」って奴の実相ですか。

福来 ……まあ、そういうことだろうねえ。

橘 (いきり立って)全く他人事^{ひとごと}みたい！「教員淘汰」！先生ほどの博士が、む

ざむざ「淘汰」されちまって構わないっていうんですかいつ？先生まで、ダーウインの進化論が人間社会においても真実だなんて言い出すんじゃないでし

ようね。

福来

（微笑）君の社の、幸徳秋水も同じようなことを言ってなかったかね？

橘

ああ、あれは、幸徳さんが言ったのはですね、もし「自然淘汰」が人間社会においても真実ならば、進化の結果どうなるかというところ……資本家は滅び、社会主義の世の中が実現する。……ま、自分が大逆事件で「淘汰」されちゃったんだから……洒落にもなりませんや。

福来

……新しい国家の教育方針に適應できない教員は淘汰される。劣るもの、生存条件に適應出来ないものが脱落していく「優勝劣敗」が、進化の第一の法則だというが、それを当てはめるにしては、人間社会はあまりに複雑過ぎる。この最高学府ですら、日清日露の戦勝から、この間の朝鮮併合までを、「優勝劣敗」の進化の証しなどと平然と言う輩が跋扈する。科学的思考を教育せよと命ずる者に限って、最も非科学的に思考している証左だよ。幸徳さんなんぞは、その被害を蒙った最たるものだ。

橘

福来先生、御自身こそでしょう！

荷を造りながら語る福来の周りを、悲憤して歩く、橘。

福来

そんなに同情しとるなら、少しは手伝おうとか思わんのかね。

橘 あ、これはしたり。してますよ、同情！いや、憤慨も。ま、それより、少し休

んで、ひとつ（一杯）いきましよう。明日あたり腰に来ますよ。本より重いものは持たんのでしょう？

福来 高山の小学校を出てから、随分奉公にやらされた。君ら、江戸の文士崩れより

余程頑丈だ。

橘 凶星、赤星十三郎。ま、いいじゃありませんか、（片隅の湯呑みを突き出し）……御船千鶴子の、命日ですし。

福来、と胸をつかれ、手拭で顔を拭い、酒を受ける。

二人、目で礼を交わすと、酒を飲み始める。

橘 ……うまい。

福来 ……。

橘 ……実は、お送り頂いた（鞆から新刊本を出し）ご本のお礼を申し上げようと思いましてね。「透視と念写」。ありがとうございました。畢生ひっせいの大作ですね。いわゆる「千里眼事件」の……おっと、先生はお嫌でしょうけど、世間ではどこかの「千里眼事件」に……。

福来 「世間」じゃない。君ら新聞の連中が「事件」にしたて上げたのじゃないかね。

私にとっては、それも未だ解明されざる人間の能力の研究過程に過ぎない。「事件」だの「騒動」だのと、まるで講釈でもあるようだ。

橘

「事件」というのは、蒙昧な世間の連中に共通の理解を与えるためのいわば「便法」ですよ。

福来

この本を出したのも、千鶴子さんと、長尾郁子さんの能力について、真実を詳らかにしなければならぬ学者としての義務があったからだ。孜孜たる学究の営みを、君たちときたら……。

橘

（少し鼻白み）しかし、好きだなあ、この序文。うちの社主も……、涙香先生も手を打って喜んでましたよ。（開き）「雲霞のごとくむらがる天下の反対学者を前に据え置いて」いいねえ、「雲霞のごとくむらがる」ですよ。「余は次の如く断言する。透視も念写も事実である！」（嬉しげに）「余はいかに月並み学者の迫害を受けたからとて、学者の天職として信ずる道を踏まずにはいられぬ！」

福来

（苦笑して）教授になれなかった筈だ。

橘

ああ、それぞれ。元良教授が亡くなった時、東大心理学科の次なる教授は、誰もが福来先生であろうと話していました。が、開けて見たれば、あの松本って助教授だ。あの野郎、福来さんの念写実験を、「イカサマだ」って言いふらしてた三浦って学生の指導教官でしょ？何が「教員淘汰」だ。平仄が合い過ぎて

いまさあ……。

雨の校内を眺め、静かに酒を飲み干す福来。橘、注ぐ。

福来 ……野に下ったからといって、私は透視能力の研究をやめる訳ではない。枷が

なくなつて、いつそさばさばしている位だ。橘君にはいろいろと世話になつた。拙いが、その本はせめてもの私の感謝の印です。

橘 ……耳が痛いなあ。うちは「東京朝日」の薄井さんのように、真性の福来擁護派ではありませんでしたからね。

福来 しかし、丸亀のあの実験中断以降、ほとんどの新聞が興味を失つて引き上げていった中で、取材を続けてくれた。こうして今も。……何故です？

橘 ……さあ、好奇心……ですか。私の、というより、読者の。

福来 善き哉。好奇心こそ、科学精神の基ですよ。

橘 これで先生に舞台から降りられたら、討ち入りのない忠臣蔵みたいなものですかからね。

福来 誰が師直だい？第一、私に大星は重すぎるよ。

橘 いいや、先生が大星由良助じゃないと話が始まりませんよ。それで、捲土重来、千里眼を否定した茶坊主学者共をばったばったと撫で斬りにするという筋書

きはとうです？

福来

おいおい。

橘

なにせ我が「万朝報」は「一に簡単、二に明瞭、三に痛快」が社是となっておりますんでね。

福来

私は事実しか語らぬよ。

橘は、何か決心するように、飲み干し、注ぐ。雨の音しばし。

橘

……ねえ、先生。真実って奴はね、事実そのものでは、本当らしく見えないものです。一寸磨きをかけてやりませんとね。

福来

科学的精神とは合い入れぬな。

橘

そうでしょうか……。私は、この事件の大詰おおづめを書かなくちゃいけないですよ。おこがましいようだけど、それが「千里眼事件」を追い続けた新聞記者の「責務」ですからね。

福来

「責務」。……いい響きだ。

橘

私は、御船千鶴子と、長尾郁子が、何故死ななければならなかったのか、これから千里眼事件はどこへ行くのか。それを書かねばならないんです。読者にも、……いや、それは嘘だな。少なくとも私の中で、千里眼事件は、まだ終わ

つちやいないんですよ。

福来 意地かね、君の。

橘 かもしれないせん。

福来 この国の国民は、ものを忘れるのが実にうまい。ま、こんな小さな島国にひしめきあつて、恨みつらみを忘れない民族だったら生存出来んだろうがね。……すべては、君が、見てきた通りだ。それだけだ。

橘 いえいえ、まだまだ腑に落ちないことが多すぎます。お聞きしたいことばかりだ。いや、先生だって、内心そう思っているんじゃないやありませんか？あの二人を殺したのは……、俺たちだって！

福来 ……そう……、私にも言わせたいのか？

福来、橘、ともに言葉を捜し、睨みあう。

○・Lして道具が、静かに次景へと替り始める。

御船千鶴子は、木箱を抱いて、中央奥、背を向けて座り、中のものの透視を始める。他の人物もゆっくり登場し、板つく。

橘 ……たった三年前ですよ。「昨日のこのように」って物言いは陳腐だが、ま

つたく、まさにそれに近い思いですよ……。

福来、そのまま、千鶴子を見つめたまま座る。

橘、それを見ながら、静かに退場。

第二景 京都、麩屋町。旅館俵屋の二階座敷。

どこかにスライド、あるいは文字情報として、

「明治四十三年九月五日。午後。京都、麩屋町。俵屋の二階。」

正面の葦戸が開け放たれて、光りに溢れる夏空。京の家並み。厳しい残暑。風鈴。蝉。

中央に、皆に背を向け、箱を抱くようにして頭を垂れ、透視に集中している千鶴子。彼女を大きく囲むように、上手なりに福来、京都帝大の今村博士。下手側に義兄の清原と、父の秀益老人が、座して千鶴子を注視し続けている。福来も今村も、しばしばそつと手元を覗こうとする。

思わず扇子をばたつかせる福来。皆「しっ」と制す。

風鈴が鳴る。そつと止める今村。など、じとつとした時間があり、やがて、千鶴子は振り向く。かなり消耗している様子。

千鶴子

……見えました。……「天地」の「天」という字に、……「侍」。それに「左」という三文字に思います。

福来と今村が、木箱に糊付けした紙封をせわしなく改め、破き、中の錫すずの壺つぼを開けて文字の書かれた紙を取り出す。

今村 (広げる) 的中です！

清原 (のぞき込んで) また、的中ばい！

秀益 千鶴子、ようやった！ようやった！

福来 ……素晴らしい。……いや、素晴らしい。

今村 こういう時、科学者は何と言ったらよいのでしょうかねえ。参ったなあ。

福来 私が初めて熊本にうかがった時より、随分と上達しているように思えます。

清原 それはもう、一所懸命精進しよりましたけんなあ。

秀益 わが子ながら、天晴れ。大層なもんばい。

千鶴子、疲れのため、膝を崩す。今村が脇息を取ろうとする。

秀益 今村先生！もったいなか！（間に入って、千鶴子へあてがう）

今村 ご苦勞様でした。さ、休んでください。横になっても構いませんよ。（患者に接するように優しく、手ずから水を入れて）水を飲んだ方がよろしい。

千鶴子 ……ええ。大丈夫です。ありがとうございます。

緊張が解け、急に暑さが戻る。男たちは、扇子をばたつかせたり、首を拭いたり。

今村 熊本も南国ですが、京都の夏は地獄でしょう。

秀益 やっぱ、五月のハレー彗星の影響でしょうかのう。

今村 まあ、そんなこともないでしょうが……。

清原 父様！そぎゃんこつば訊くけん、熊本の田舎者はと。ほれ、先生方に笑われておりますたい。(福来たちには)市内には、帚星の尻尾が地球ばかすむっと、呼吸ん出けんごつなつちゆうて、人力(傳)んチューブば集むる馬鹿まで出まして、田舎は話になりまつせん。(呵々と笑う)

福来 いやあ、東京でも似たようなものでした。基礎教育も体制だけは整って参りましたが、いざとなると、メッキが剥がれて、すぐ迷信にすがりたがる。科学的思考というか、理性的なものの見方が不足です。

清原 そんなとおりです！(千鶴子へ風を送り)もう大丈夫か？

千鶴子 (こめかみを抑え) ええ……はい。

清原 大丈夫？……松合での、私が催眠術ば使った療治を始めた時は、そりゃあ先生、

偉い難儀でしたばい。迷信を解くちゆうとは、猿に九九ば教ゆるよりかやっかいですな。催眠術と聞くと皆、出刃でば亀かめんごつ、いかがわしかことばすると考ゆる連中ばかりでの。あ！福来先生も、大分やられたごたるですな。な。（磊落に笑う）

福来

国民だけじゃありませんよ。催眠術というだけで、学术界でも一段低く見る風潮が絶えない。まったく困ったものです。明治ももう四十三年ですよ。最近の科学の長足な進歩は、必ずしも国民の……、科学者たちですらすらですよ、科学的思考法と比例しておらんのです。

今村

判るなあ。逆に、科学に置いてけぼりを食わされた無教育な連中が、反動のように知性の空白に他愛ない迷信を詰め込んで帳尻を合わせようとするのです。

など話しながらも、神経質な千鶴子の一挙一動に、過敏に反応する男たち。

清原

大丈夫？……これ（千鶴子）も、可哀想か女子おなご（おなご）で。姑と反りが合わず、半年で戻らされてから、この病院を手伝わせておりますが、今でも時々、右の難聴やら、耳なりやらが出るごたつです。こうしてお二人の博士にお墨付きを頂戴し、どしこ肩身が広がるうのう。

千鶴子 (頷く) 私、先生方の面目を潰さんで、あの、ちつとでんお役にたっておりますか。今はそればかり案じられて……。

福来 いいえ！大丈夫！

今村 大丈夫！

福来 余計なことを考えずに、穏やかな精神でおられるのが肝要です。千鶴子さんの透視能力の卓越したることは、今村さんも私も、何ら疑いを持っておりませんから。

今村 大丈夫！すべて福来先生のおっしゃる通りです。安心して、ますますその能力を鍛練し、人類の進化に貢献しましょう！ね。

福来 大丈夫。

今村 そのために、医学者たる私と、心理学の福来先生がついているのですから。ね。

千鶴子 嬉しゅうございます。私、その、先生方のありがたかお言葉で、生まれてきた甲斐が出けました……。 (嬉し涙を浮かべる)

千鶴子は、感情の起伏が激しく、喜怒哀楽の幅が広い。

今村 (干菓子をすすめ) 有平糖あるへいとうでもいかがです。脳が休まりますよ。

秀益 京都と東京の帝大の偉か両先生に、こぎゃんも御褒め戴いて、千鶴子、お前は

ほんなこと果報者ばいねえ。

千鶴子

(頷いて菓子を食べ) おいしか……。やっぱ京都ねえ……。

秀益

こぎゃん豪儀な宿に泊まらせちもろて。(鼻をすする)

清原

義理とはいえ、私やこれ(千鶴子)が真の妹んごつ可愛かつです。熊本に催眠術が流行したつが、日露戦争の前後でしたか……。

秀益

素人のかけた術がほどけんで、白痴こけになった子の出たり、えらい騒ぎじゃった。

清原

何遍もいうごたるが、癪性かんしょうで寝込むことの多かこの子に、その催眠治療をしておるうちに、透視の力が現れた時は、そりやもうたまがりましたばい。丁度そん頃、福来先生の「催眠心理学」ちゆう本が手に入って。そりやあもう、これこそ「天のお告げじゃ!」と思うて。寝食を忘れて勉強いたしました。深かご縁ですなあ。

千鶴子

観音様のお導きですたい。

秀益・清原

(口々に) おう、そうたい、そうたい。

腫れ物に触るように千鶴子に接する父と義兄。福来と今村も、見交わして気を引き締める。

千鶴子

……ああ……暑か……。

一斉に扇あおごうとする四人。

千鶴子

（自分で扇あおぎ）先生は、なして催眠術など研究なさったのですか？お友達が減りましたでしゅう？

清原

（笑って）まったく酔狂ですな。

福来

そうですねえ、「人間の可能性」ってことを信じたかったからかなあ。

千鶴子

人間の、「可能性」？

福来

ええ。人間には、普段表に現れない、まだまだ素晴らしい能力が眠っているのではないだろうか、ということですよ。虫の知らせとか、第六感とか。そして千鶴子さんの透視能力とか……。私は、その真実を見極めたいのです。人間は、もつともつと沢山の能力に満ちているはずなんです。

今村

素晴らしいじゃありませんか、人間はもつともつと進歩出来るはずなんです。

千鶴子

千鶴子さんを出迎えた多くの人たちには、あなたが光り輝いて見えたでしょう。無理しても出て来てよかったです。大阪でも、京都でも、駅に着くたんび、あぎゃん沢山の人が出迎えてくるなんて。

福来

（今村へ）新聞の力というものは凄まじいものだなあ。

今村

ものすごい野次馬でした。

福来 (千鶴子を意識し) ものすごい歓迎の群衆でした。

今村 (あわてて) 千鶴子さんが、こう、汽車のタラップで、日傘をこう持って、歓迎の群衆に、ちよつと手を振った風情は、今時の「女優」のようでしたよ。ね、福来先生。

福来 (今村のお世辞に呆れつつ頷く) おお……おお……。

千鶴子 ……私、女王様にでんたったごだった。嬉しかったあ。

一同 (口々に「女王様たい」など頷き合う)

千鶴子 ここまで来たつですけん、長谷の観音様へもお参りしとうござります。

今村 奈良……ですか……。

清原 清水さんで辛抱しなつせ。

秀益 千鶴子。今度の上京の第一義は、東京の殿様のお召しばい。判っておるとか？奥方様にお子様もが授からぬ因もば透視せよとのたつての御依頼。物見遊山のごつはしゃいどる場合じゃなからうが。

千鶴子 もちろん身に染みて判っております。

秀益 また、その時になって、頭痛や気鬱きうつになったら、私や腹を切らんば相済まぬ。

(後ろの風呂敷包みを寄せ) ほれ、脇差も持って来ておつとばい。

千鶴子 お父様！……申し訳ございません。(すねたように) もう、我が儘は、決して、

死ぬまで申しません。

秀益　また、そぎゃん口ば……。

清原　まあまあ、父様も。千鶴子も、先生方の前ぞ。

福来と今村、見合わせ、話を切り出す。

福来　（注意深く）……そこでだ、皆さん。先日から今村さんと話し合っておったの

ですが、この際ですから、その、細川侯爵の御召しが済んだ後に、どうでしょう、千鶴子さんの透視力を、東京の、私の先生方にご披露願えんでしょうか。

秀益　東京で？

清原　それは、その……、いわゆる「公開実験」ちゅう奴やつつですか？

福来　（千鶴子を驚かさぬように）いやいや、そんな大袈裟おかしなに考えんください。たかだか数人、いや、二、三人かもしれませんが、まあ、まだ話はこれからの話ですから、もちろん、あくまでも千鶴子さんが「よし」と頷うなづいてくれればの話ですが。透視や予知、テレパシーなどの、現状の自然科学では解明出来かねる潜在能力を、疾とく研究すべしとの気運が、内外問わず満ち満ちております。露西亞ロシアに勝って、既に一等国いちとうこくに伍なせんとする我が国も、この分野において欧米列強の遅れをとっては末代に禍根を残すと言わざるを得ません。判りますか？

千鶴子　……。 （耳が悪いせいか、一寸首を傾げ、じつと人の目を見て聴く）

今村 いかがですか、お父上。清原さんも。素晴らしい機会だとは思われませんか？

清原 千鶴子は松合如きこまんか村にはもったいなか人間じゃと信じておりました。

こぎゃん有り難かお話はなか。是非とも。のう、千鶴子！

福来 千鶴子さん。大阪、京都、この道中の間の人々の大歓迎をどう思いますか？皆、

あなたの世に出られんことを渴望しておったのです。あなたは現在の科学や哲学の袋小路に新生面をもたらす「新科学」の可能性そのものなのです！あなたを、皆待っていたのですから……！

今村 大丈夫。心配ありません。いつも必ず私たちがついておりますから。ね。

清原 千鶴子！

千鶴子 (迷って父を見る)

福来 お父さん。

今村 お父さん！

清原 父様！

秀益の方へ身を乗り出す三人。困惑の秀益。

秀益 うーん。……こん子は、気分次第で……いろいろ難しか時もあるけんのう……。

千鶴子 私に……出来ましようか。

清原 出来る！必ず出来る！私が教えたでつやればよか！

福来 (清原の勢いに弱りつつも) そうです。出来ますとも。

今村 大丈夫。あなたなら、きっと上手に透視が出来ますから。いつものように、心をやすらかにして、ね、(優しく) ゆっくり大きく、深呼吸です。肩の力を抜

いて、目を瞑れば……。

福来 おいおい、それは私の専門だよ。

今村 そうでした。(朗らかに笑う)

福来 千鶴子君。科学の進歩のため、あなたが必要なのです。我々に力を貸して戴きたい。この通りです。

福来、手をついて頭を下げる。今村もならう。驚く清原と秀益。

清原 先生！

秀益 何ちゆうこつば！手ばあげて下はりまっせ！

清原 千鶴子、お二人の博士様がこぎやんまでして！父様、はいと申し上げねば罰が当たりますぞ！

秀益 ううん……。 (困惑して千鶴子を見る)

千鶴子 ……私には、私のなんがそぎやんお役に立つとかよう判りまっせん。ばってん、

お国が一等国になって、科学が進歩して、お二人の面目が立つとでしたら、私
んごたる、耳の悪か、出戻りの女子には、全くの冥利でござります。よろしゅ
うお願い申します。

福来

ありがたい！

一同、安堵して、捨て科白に喜び合う。千鶴子の手を取る福来たち。

暑さが戻る。

と、廊下で仲居ともめる声。橘である。

橘

（祝儀を渡しているらしい）いいから、いいから。これでね。いや、ほんとう
に身内なんだから。（など捨て科白に入ってくる）いやあ、遅くなりました。
うわあ、千鶴子様、顔色もおよろしく、暑気しよけあた中りもない御様子。何よりと存じ
ます。お父上、この度はお招き有り難うございました！

図々しく挨拶をまくしたてる橘。「？」の一同。互いに、「知り合
いか？」と見交わす。

橘

それにしても、今年の暑さは尋常じゃありませんな。やっぱりハレー彗星の影

響でしようかねえ。

今村 (清原らへそつと) お知り合い……？

清原 いいえ……。先生方の……？

福来たち いいえ……。

橘 (それには構わず秀益へ) その見事なお髭！御船秀益先生でございますね！私

でございます。先日、千里眼のお嬢様のお話を、不躰ながらお手紙でお尋ね申した朝報社の橘でございます。社主、黒岩涙香もよろしくと申しております。

先日は、御懇篤なるお返事を頂戴致し、まことに痛み入りました。お言葉に甘えて、京都の方へ参上致しました。

清原 父様。こぎゃん新聞記者、呼んだとですか？

秀益 (困惑しつつも、威厳を保とうと) ああ、いや、これ(千鶴子)んこつで、何度か丁寧か手紙を戴いておったもんだけん。熊本まではなかなか難しかが、今度東京へ上ることになったけん、とは書きました……。 (橘へ) ようここが判りましたなあ。

橘 判りますとも。何しろ特別列車なんですから。熊本をお発ちになってより、ご一行様の道中は、電信にて逐一日本中の新聞に掲載されておりますよ。私も、辛抱しきれず京までお出迎えに参ったという訳でございます。

秀益 わざわざ東京から。私たちのために。

橘 はい！一刻も早く、千里眼夫人の御顔をおんかんばせを拝みたく。

清原 (不快そうに) ああ、君ね、ここは、偉か先生方の大切な会談の席たい。下がんなつせ……。

橘 (構わず) 今村先生でございますね！「大阪朝日」に連載しておられた「透視に就いて」！私のような門外漢も、大変心を動かされました。私は「万朝報」の一記者に過ぎませんが、第一面から一切の広告を排し、しかも全三段ぶち抜きで、熱烈なる寄稿文を連日の全十九回！こちらの福来先生……でございますよ。との、東大京大の相和あいわしての五十二回にわたる千里眼実験記録が、眼前に臨むがごとく鮮やかに詳述されておりました。口惜くちおしいが、敵ながら天晴れな報道！兜を脱ぎました。今村先生はお書きになっておりました。「千鶴子の透視行為のうちには、詐欺的、詭計きけい的なものは認むべきものはなく、透視後の実験物に何の疑惑を生ずる痕跡もなかった」！皆様にお目にかかれて光栄至極でございます！

橘はしゃべるだけしゃべって、座につく。千鶴子、笑い出す。

千鶴子

……喉、かわきまつせんか？

橘 いささか。(笑って、千鶴子の勧めの水を飲む)

清原 なんや、こやつ……！無礼な奴じゃのう……！

秀益 猛雄君。まあ待ちなつせ。(両博士へ) いや、松合へ何度でん、実に熱のこも

った取材の手紙を寄越すもんでして、私が根負けしたごたる次第で、まあ、この老人に免じて、一時ひとときご同席をお許し願えまっせんでしょうか。それに、彼の父君も、西南戦争の時、熊本鎮台で籠城したというではありまっせんか。

清原 ほんなこつや、それ？

福来 (笑つて) まあ、よいでしょう。どうやら今村さんのすてきな顔るつきの読者のようだし、千鶴子さんもお疲れのようだ。今日のところは、実験はもう、ね。

今村 はい。こちらの記者さんも、大分勉強なさつておられるようですし。

橘 (皆へ) ありがとうございます！嬉しいです。いやあ、お近づきになれて本当に光栄これに勝るものはございません！いやあ、千鶴子様ですねえ。本物だ！千里眼千鶴子様。こちらがお義兄様の清原猛雄先生！

清原 全く凶々しか男ばいねえ。だけん東京人はすかんとたい。

橘 御船先生、御恩は忘れません。我が読者は、お嬢様のご活躍を待ち望んでおります。不祥橘四郎の健筆を楽しみになすつていて下さい！

上機嫌な橘。つられて和む一同。日暮らしの声。

今村 ……大分、陽が傾きましたねえ。いつそ夕涼みがてら、清水まで行ってみますか。

千鶴子 嬉しか！私、東京での成功を観音様うちにお願いしてまいります。

秀益 そるがよか。そるがよか。

橘 清水寺ですかあ。(福来へ)やはり透視には、仏法の行か何かが有効なのか？向こうの連中は、テーブルターニングや霊視には、精霊の力を借りると言っていますね……。

福来 私は、哲学者です。催眠術や異常心理の研究をする者だが、安易な「心霊主義」には同調しませんね。

今村 スピリチュアリズムですか……。

福来 知っているかね、スピリチュアリズムの定義を？

橘 え？ええ？

福来 一つ。人間の魂は、死後も存在する。二つ。死者と生者との交信は可能である。

橘 (復唱しつつメモする)

福来 今村さん。私は千鶴子さんの千里眼が、霊の力などではないと、そう思いたいのだ。

外を見ていた千鶴子が、

千鶴子

あ、燕！気持ちよかごたるねえ……。おーい、燕！秋になったら国へ帰っとねえ？こんまか身体で、どうして遙々海を渡って行かるとかねえ……。なして毎年同じ巢へ戻って来らるっと？おーい……。

燕の声に、日暮らし。涼しげに風が抜ける。

○・Lして、道具替りが始まる中、橘が原稿を書き出す。居残る人、退場する人、適宜。

橘

（有り合わせの紙を床に置き、団扇をバタつかせながら、寝そべったりして書いている）うーん……と、こんなもんでどうかな。「（読み）来る十四日に予定さるる千里眼の公開実験において、福来助教授は、恩師元良教授の助言の下、我が国物理学界の泰斗にして、前の東京帝国大学総長山川健次郎博士の出席を実現させたり。」。いいね、いいね。（続きを書きながら）えー……。「所は……、翹町なる博文館社長……大橋新太郎氏の邸宅の二階を用いることになりたる由。……すごいことになってきたぜ、本当に。いきなり総大将の山川さんが御出座ということは、須らく日本の科学者すべてに出陣のお触れが出たような

もんだろう？えーと、(メモを見つつ書く)「千里眼御船千鶴子女史を迎え撃つは、」……「迎え撃つ」はまずいか。「迎えるは、物理学の田中館愛橘博士、物理学の丘浅次郎博士、精神医学の呉秀三博士、宗教学の姉崎正治博士……」うひゃあ、錚々たる申そうか、綺羅星の如しというべきか……ここに福来今村たった二騎で斬り込むのかい？大丈夫かなあ、あの二人で。生きて帰ればめっけもんだぜ……。 (書き続ける)

次景の道具、整うにつれて、板つきの人物、ゆっくりと登場す。橘は原稿を書き上げ、懐中時計を見ると、「いけねえ」と小走りに退場。

第三景 東京麹町。大橋邸の洋間。

スライド「同年九月十四日。昼前。」

東京での公開実験の当日。晴天。

ソファ―、脇机などのある洋間。正面に瀟洒なガラス窓。弧を描くように二階座敷へ上がる階段。下手に玄関へ通じる扉。脇机に、箱に乗せた実験用の予備の鉛管。奥の小机に、鋸、紙、硯など。

呉、田中館、姉崎、丘らが、実験の始まるのを待っている。階段の途中で、上の様子を伺っている今村。緊張した面持ちで、隅の方に立つ秀益。と、二階より降りてくる山川と福来。立ち上がって注目する一同。

山川

（皆の視線にやや驚き）まあまあ。そう焦りなさんな。一服させてくれよ。（とソファへ）

今村

福来さん。（「どうしたんです？」）

福来 もう暫くかかりそうだ。

今村 「精神統一」……ですか？

福来 庭を眺めて、深呼吸をしている。

山川 せくことはあるまい。そりゃあ誰だって、初めての東京で、見ず知らずの、こんな難しい顔付きの博士連に睨まれて、緊張するなという方が無理だろう？いわんや婦人においてをやだ。焦らせたら気の毒だよ。せつからは実験の敵だ。
(煙草を出す)

田中館 (火をつけながら) 山川先生には随分叱られましたねえ。「己の仮説を証明する結果に一足でも早く近づきたい！それが科学者の最も陥りやすい罠だ」と。ましてや相手は人間だよ。

田中館 我々の実験材料は不平不満を申しませぬからなあ。

と、明るく笑う。福来、今村は恐縮。

福来 申し訳ございません。

田中館 いやいや。二階の彼女が、どういう精神作用で、あのハンダづけした鉛の管の中身を透視するのか。出来る限り平生へいぜいの実験条件に近づけてやりたいじゃないか。

福来 はあ。

呉 やはり、その、難しいのですか？透視に入るまでは、いろいろと。

福来 （今村と見合わせ）はい。感情の起伏が激しいと申しますか、それが透視能力と関係があるかどうかは今後の研究の課題ですが、環境や実験方法の変化には、しばしば著しい不調を訴えます。

姉崎 身体からだの？

福来 あ、はい。時に頭痛ずう、耳鳴りを訴えることがございます。しかし、新しい方法に慣れてくると、段々の中成果が上がるというのがこれまででした。

田中館 （今村へ）今度の方法は、いつ頃から？

今村 今月の三日からです。

田中館 十日ちよつとか。

姉崎 結果はいかがでしたか？

今村 ええ。翌日には的中いたしました。確立は低かったです……。

山川 エックス線やラジウムは鉛を透過出来んのだから、全く新しい類いの光線のよ
うなものかもしれないね。

田中館 キュリー夫人なども、SPRで透視やテレパシーの研究をしないといいますな。

呉 SPRというと？

田中館 英国の心霊研究会ですよ。

丘が、二階の様子を伺うように見上げ、

丘 よろしいのですか？あの二人だけにしておいて。

今村 （意味をはかりかね）は？

丘 被験者と、その義兄とかいう彼と二人で。催眠術をつかうのでしょ、彼？

田中館 ？だから？

丘 いやね、何か強い暗示をかけたたり、特殊な方法で彼女の透視を補助するような、何か……そんなことありませんかね？

山川 （笑い出し）補助するって、何を。（机の鉛管を手に）見たまえ。水道管に使う鉛だよ。福来君の見本どおり作ってある。中に意味のない漢字を三文字書いた紙を入れて、ハンマーで潰し、端をハンダづけまでする。（丘へ放り）人力で中の紙を取り出すことができるかね。中の紙に三文字を書いたのは私だが、作った二十個の内のどれが彼女に渡ったか、私にも判らんのだ。

丘 それは承知しておりますが……、まあ、あらゆる可能性を考慮しておきませんか……。

福来 （むっとしたのを抑え、明るく）丘先生は、この実験が「詐術」さじゆつであると、そう？

丘 いやいや、とんでもない。そこまでは言いませんがね。

今村 (福来の言を抑えるように) この鉛管は、鋸でも切らない限り、中の紙を取り出すことは不可能です。仮に、超絶の技を用いて、立ち会い人の目をかすめ、取り出したにせよ、それを読んで、戻して、無傷で復元することが可能でしょうか。実験の厳密性は、十分確保されていると思われませんが。

丘 (鉛管を手に) もちろん、これの完全なのは判る。判りますがねえ……。ほら、所詮なんといっても人間のすることですから……。

皆、残りの鉛管を手にして、各々に話し込む。丘の含みのある態度に怒る福来。そつとなだめる今村。おろおろする秀益。

と、そこへ、下手より、緋に袴の橘が、「御船家の書生」の振りが入ってくる。

橘 失礼申します。

福来ら (「あ!」)

橘 旦那様、おいでなはりますか? (秀益へ) 旦那様! 宿ん方に松合から電報が届きましたばってん、お届けに参りました。

図々しく秀益へ電報らしきものを渡す。啞然と見るしかない、福来、
今村。

秀益 (橘の気合に、やむなく紙を開き) ああ……ああ……うん。……御苦労。

橘 昼のお薬ば忘れて行きなはつとで、それも持つて参りました。

秀益 く、薬？

呉 ご病気ですか。

橘 胃ですたい。緊張するところが一番ようないのです。

秀益 (やむなく) うう。

呉 それは、今日は大変だねえ。

橘 そんな通りでござす。

一同 ? (「薩摩弁?」)

福来と今村が、目で叱って橘を追い出そうとするところへ、二階より清原が降りて来る。

清原 お待たせいたしました。申し訳ございませんでした。

福来 どうだい？

清原
(頷く)

山川
よおし。(立ち上がり、厳しい顔に戻り) 諸君。それでは、私が代表して実験の立ち会いをさせていただく。もしこの透視が真実であるとすれば、学術上の一大発見である。……我々は、歴史的瞬間に立ち会うことになる。

一同、緊張した面持ち。頷く福来、今村。この様子をメモし始める
橘。

山川
……初めてレントゲンの実験をした時の興奮を思い出すな。

福来に先導されて、山川、今村、二階へ上がる。橘に驚く清原。そ
っと耳打ちする秀益。

今村と福来はすぐ降りて来て、

今村
……(一同へ) 開始です。

緊張と不安の時間が訪れる。

各々の思いで、黙然と待つ一同。

時間経過。(実際は数分だったらしい)

何やら上の様子が変わり、そつと覗きに上がろうとする今村。と、山川が降りてくる。集まる一同。秀益と清原は入れ替わりに上がる。

山川

(鉛管をかざし) 異常は認められない。諸君も確認されたい。

鉛管を廻して確認する一同。

疲れた千鶴子を支えて、清原、秀益が戻る。

福来と今村は、彼女をソファーに座らせるよう指示し、紙と硯箱などを支度する。

千鶴子は背筋をのばし、透視した字を墨書する。見つめる一同。

山川

(改めて紙を皆に示し) 投、丸、射。この三文字が見えたそうです。いいですね、千鶴子さん。

千鶴子

(頷く)

山川が、鋸で鉛管を半分に切り、割った中からピンセットで紙を取り出す。手伝う田中館、姉崎ら。

山川が紙を開くと、皆我先にのぞき込む。息を呑む一同。

今村

的中だ！

一時に緊張から解放され、歓喜に躍り上がらんばかりの福来、今村、秀益、清原。何故か、橘も一緒に手を取り合って喜び合う。

千鶴子は、皆より遅れて、安堵の思いに浸る。

山川以外の学者たちは、各々に感嘆や衝撃の声を上げる。

福来

(改めて) 千鶴子さん、おめでとう。(何度も頷く)

千鶴子

……はい。

千鶴子は、極度の集中の反動で失神しそうに虚脱する。あわてて抱きとめる福来。

清原

千鶴子！しっかりせんか！

今村 (福来へ) 上へ。寝かせて上げた方がいい。

秀益 (涙ながらに) ようやった。ようやった。

田中館 御苦労でした。いやあ、凄いものを見せて貰いましたよ。

興奮の醒めない学者たち。実験物を改めたり、メモをとったり。千鶴子が、清原たちに支えられて階段を上がりかける。福来は二、三段のところで初めて山川が机に置いた紙を見つめ凝然と腕組みをしているのに気づく。

福来 ? 今村さん。

今村 え? (福来の目じらせで、山川の異変に気づく)

福来 山川先生……どうなさいました?

一同 (山川の様子に気づく)

山川 ……不思議だ。

福来、今村は、山川の脇へ戻る。千鶴子は清原に支えられたまま立ち止まる。

福来 ……と、おっしゃいますと？

山川 私の提供した紙の中に、「投、丸、射」など、ない。

一同、「え？」。空気が凍りついたようだ。

山川 (皆へ紙を示し) これが私の書いた文字の控えだ。鉛管二十個分。各々に三文

字ずつ。小学校用の教本の中から、意味を持たぬように抜き出した漢字で、同じものは一つもない。……どうということだ。投も丸も射も、私は使っていない。

福来 失礼します！

福来は、山川の手から引ったくるように取り、食いつくように読む。

今村も、奪うようにしてのぞき込む。騒然となる学者たち。動揺する秀益と清原。千鶴子一人、不思議そうに皆を見下ろしている。

福来 (何度も読み返し) ……ない……ない……。確かにありません。

今村 どうしたっていうんでしょう、これは……。

田中館 (語気を強め) 福来君、説明してくれたまえ。

福来 (思わず) さあ、どうということ……こんなことが……。その……。

丘 (冷やかに) これでも「透視が出来た」と言えるのですかねえ……。

姉崎 しかし、鉛管に傷は全くなかったでしょう？ あれは、透視でもしなければ読め

ませんよ。いくらなんでも。初めから知っているの……でも……なければ……。

山川 ……判らん！ 全くもって不可解也。千鶴子さん。君にはこれがどういうことか説明できるか？ ええ？

千鶴子は、不安そうに皆を眺めていたが、なかば失神しかける。あ
わてて抱き取る清原。

清原 しゃんとせんか！

秀益 (誰に言う出もなく) おめくな！ おめかんでやって下さい！ 千鶴子はなあんも悪かこつをしちやおらんとに！

山川 (つとめて冷静になろうと) 婦人をここに座らせて差し上げなさい。いいから、遠慮せずと。

秀益 すまんことです。(千鶴子を抱いて、一緒に座り、のぞき込むように小さく)
千鶴や、大丈夫かあ、ようやった、ようやったけんな……。 (幼子に対するよ
うにあやすのである)

山川 見たまえ、この字を。私の手ではない。

田中館 確かに。

呉 (控えの紙と見比べる) なるほど、そうですね。

姉崎 一体誰がこんなことを……。

山川 福来君。

福来 はい！

山川 (紙片を取り、差し出し) これは君の字だね。

福来 (受け取り) はい。これは確かに、私の書いたものですが……。

一同 え？

今村 福来さん……！

福来 (困惑して、汗を拭う) うん。うん……。

言いよどんでいた福来だが、父の胸に顔を埋めるようにしていた千鶴子が、

千鶴子 ……いいえ。私です……。

一同 (え?)

秀益 どぎやんした?何を言い出すとか。

清原 話がよう判つたらんとじゃろ。寝とれ、寝とれ。

千鶴子 ううん。あれは……あの鉛管は、私が福来先生にもらうたんです。

今村 ……どういうことですか？

千鶴子 私、心配だったんです。肝心の時に、もし見えなかったらどうしようって。ですけん、私、一昨日福来先生おとといにお願いして、お稽古用にそっくりのものを作っていただいたんです。

山川 (福来へ) そうなのか？

福来 え、ええ、確かに。

千鶴子 その晩、みんなづれ本郷座へ連れて行っていただいて、楽しかったなあ。宿に戻ったのは十二時を回って、私は、先生の作って下すつたものば懐に抱いて寝ました。抱いて寝ると、もやもやしたものが消えて、読みやすくなるそうです。前にも、そうやっておりましたし。ずっと抱いていると、千里眼のお守りになるとです、私の。

山川 (優しく) で、それを、今日も持って来たというのだね。二階の実験の時も。はい。今日渡されたものは、どうしても見えなかったもので、一昨日から身につけていた方を見ると、すぐに「投、丸、射」の三文字みが心に浮かびました。それはくつきりと。ですから、お守りの方を出しました。

千鶴子

無邪気に話す千鶴子。一同、啞然と聞く。

今村 (興奮し) じゃ、その、今日渡した鉛管も持っているんだな？今、そこに！

千鶴子 (びっくりして) はい。ございます。

千鶴子は、悪びれずに袂よりもう一つの鉛管を差し出す。今村、荒々しく奪い取り、

今村 申し訳ございませんでした！（差し出して深く頭を下げる）

福来 (あわてて同調し) 大変失礼をいたしました！

山川 (受け取り) ……なんとも…いや…。

今村 福来さん、実験用具の管理が杜撰過ぎます！わざわざ御足労下すった先生方になんと申し上げてよいか…。

福来 私が至らなかった。君にまで恥をかかせて、ゆる怒して下さい。

今村 この上は、もう一度改めて実験をご覧頂きたいと、そう願うばかりです！山川先生、再実験の機会をお与え下さい！

福来 お願い申します！

今村に引きずられるように、共に皆へ頭を下げ続ける福来。

千鶴子 (立ち上がって、福来へ) 先生？なしてそぎゃん謝りなはつと？

今村 当たり前じゃないか、こんな不手際で実験を台なしにしてしまつて！

千鶴子 台なし……つて？なして？

今村 (怒りを抑え) なしてつて、君。この状況を見れば判りそうなものじゃないか！

山川 (制し) 今村君。

今村 申し訳ございません！

千鶴子 ?ばつてん、見えました、私。そぎゃんですね、山川先生。

山川 ……まあ、そういうことだね。

千鶴子 (今村へ) ほら、ならばよかじやありませんか。私、恥ばかかせたと？しつかと見えたとに……。

今村 だから、見えたつていったつてね……！

福来 (今村を制し) 科学実験というものは、厳密な段取りを踏んで、公明正大、誰が見ても疑われることのないようにして、初めて成立するものなのだよ。判るか？

千鶴子 疑わる？つて……何ば？何方どなたが疑うと？

福来 だから、それはね……。

丘が、くつくつと笑う。福来と千鶴子にきつと睨まれて、

丘
失敬。

千鶴子
（丘を指し、福来へ）あの方が疑つとつと？

丘
私？いやいや、そんな。

千鶴子
なら、信じて下さいませたいね？透視は出来たつということば。

丘
それとこれとは、いささか違いますな。

千鶴子
どう違いますと？どちらも福来先生の作つてやんなはった鉛管でした。どっちが読めたちよかじゃありませんか？

田中館
ああ、それでか。千鶴子君は、どれも皆、福来君のお手製だと思つた訳だ。だから、どちらを透視してもよい、と。

千鶴子
違いますか？

田中館
今日渡したのは、山川先生のお作だったんだよ。

千鶴子
え？……（福来へ）そぎやんだつたんですか？

福来
そうだ。

千鶴子
（ちよつと考えて）……そつでたい、どぎやんしてん読まれんだつたとは。

一同
え？

田中館
おいおい。材料は同じなんだよ。山川先生が作られたものは、お気に召さないかい？

千鶴子
（山川を指さし）こちらの先生は、千里眼ば信じちゃおんなはらんもん。

驚き、失笑する学者たち。

福来
千鶴子さん、今日のところは失礼しよう。ね。

千鶴子
……判らん。私、判りまつせん。なんして、しっかと見えたのに。なんして皆信じちゃやんなはらんと？先生、先生……私……。

興奮して混乱する千鶴子。必死になだめる福来、秀益、清原。怒りの冷めた今村。困惑しつつ見守る山川たち学者たち。メモと観察に忙しい、橘。

道具が替り始める。

当時の新聞記事が幾つかスライドで投影される。文字が判読できずともよい。

くー！売れたねえ、この記事は！橘四郎大手柄、殊勲甲だ！（客席へ、メモを見ながら）山川博士は、我々の取材にこんなふうに応えた。「こんな間違いのために実験が完全でなくなったのは、はなはだ残念である。もしこれを悪意に解釈すれば、大橋邸へあれを持つてくる前に、開いて見たのじゃあるまいかとも思われるが、私は全然そんなことはあるまいと信じている」懐の深い男だね。さすが会津の苦勞人。白虎隊の生き残り。

ところが、この大揉めにもかかわらず、翌日、我々新聞記者だけを招いての公開実験が強行された。福来今村にしちやあ大出来だったね。実験は千鶴子の機嫌を損ねないように、一番やり易いいつもの錫の壺を使うやり方で。やってみたれば的中、また的中。こうなると俺たちも情けないね。事実を報道しているのだから、福来今村の広め屋なんだか判らなくなつて来た。ま、お互いいいことづくめなんだからいいか。

更に、翌々日、あの学者先生方の再実験が、同じ要領で行われた。（扇子を叩いて、もう講釈）この日、淡路町関根屋旅館に集まり来るは、理学博士の大頭目山川健次郎を筆頭に、同田中館愛橘、同丘浅次郎。文学博士井上哲次郎、同元良勇次郎、同姉崎正治。医学博士三宅秀ひいず、同呉秀三、同片山国嘉、同大沢謙二、同入沢達吉、同三宅鉦一。東京高等師範教授後藤牧太、学士数名、主催し

たる面々、文学博士福来友吉、医学博士今村新吉。千鶴子実父御船秀益、義兄清原猛雄、打ち揃った総勢四十七人。白皚々たる雪を蹴立てて目指すは本所松阪町……！

など、調子に乗って、退場。

呉秀三が登場している。

呉

（記者に語るように）……あー、はい。はい。再実験は、どの方面から見ても疑う余地はなかった。その、西洋でも我が国でも、今までこれに類したことは随分あったが、調べて見ると詐欺だったり贋物だったり、立派に科学の下で研究されたことはなかった。……もちろん、これは心理学の方面であろうが、その、脳の組織が変わったところでもあるとすると、医学も必要だろう。また、下等動物にあつて人間の五感にない感覚に似ているなら、動物学もだ。ラジウム線などの働きに関係するならば、物理学の方面からも研究がされねばならないと思うのであります。あー、……こんなところでよろしいか？はい。御苦労さん。はい……。

呉、退場。

第四景 再び、福来の研究室。

第一景のしばらく後。

窓の外を眺める福来。酒を飲む橘。

橘 (思い出し笑い) すべてがうまく行くような気がする時ってありますよね。第

六感って奴ですかね。

福来 気のせいだろう、君の場合は。

橘 ひどいなあ。あの時点で、確かに我が国の錚々たる科学の権威が、みな千鶴子さんの透視能力を確認し、評価したんです！それは間違いのない事実でした。先生の大好きな「事実」だった。そうですよね！

福来 確かに、あの時の興奮は……、忘れない。

橘 でしょう？だから、あの真実を真実たらしめた瞬間を、もう一度取り戻すんです、先生が！

福来 (驚き) 君は、新聞の人間だろうか？そんなに没入して冷静な報道が出来るのかね？

橘 どんなに血はたぎっていても、(こめかみを指し) ここは、氷のように冷静です！対象に没入出来ないで真実に肉薄する報道など出来やしませんよ！先生、

先生には、是が非でも第三の御船千鶴子を捜して貰わなければ！

福来
（見透かすように）所詮、君らにとつての千里眼は、新聞を売らんかなの、飯の種に過ぎないのかね？

橘
……今更、そんな子供じみたことは言いつこなしにしましょうよ。

と、ノックの音。

福来
はい……。

山川の声
山川だが。

あわてて招じ入れる福来。

福来
総長……！

山川
いいかね、少し。

福来
はい。（椅子を勧める）

山川
あ、いいよ。

橘
ご無沙汰です。

山川
君は、確か……。

橘 橘です。朝報社の。

山川 なんだかいろいろなところで会っているねえ。

橘 千里眼担当でしたから。

山川 そうそう。そうだった。……（福来へ）身の振り方は決まったかね？

福来 高野山へ入って、仏法の修行をしてみたいと思っています。

橘 高野山？（驚く）

山川 ……そうか。……それもよいかもしれんな。

橘 （思わずしゃしゃり出て）千里眼の研究はやめちゃうんですか？

福来 その研究のためだよ。

山川 それもよからう。これからは、官にあつては君の研究を援けることは出来そう

もない。力になれず残念だ。一言、労ねぎらいたかった。

福来 私こそ。未熟さ故、先生には随分とご迷惑をお掛けしました。それにもかかわ

らず、言葉に尽くせぬご厚誼を賜り、この大恩は終生忘却いたしません。

うむ。……（微笑）よい匂いをさせているな。

福来 申し訳ございません！

山川 いや、別れの盃だね。私も汲もう。

福来 はい！（湯呑みを取り）こんなものしかございませんが……。

福来、生徒のように緊張しながら、山川に湯呑みを渡し、酒を注ぐ。

山川
道は別れた。しかし、共に学究の徒であることに毫ごうも変わりはない。……身体をいといたまえよ。

福来
先生こそ、くれぐれも。

二人、酒を飲む。皮肉に眺める橘。

橘
……麗しい景色ですねえ。政府の教育調査会の中心として、学制改革、教授淘汰の総大将。あんたの首を落とすために総長に返り咲かれたみたいなお方ですぜ。吉良と乾杯する内蔵助がいるかなあ。

福来
(制し) 橘君。

山川
言わせてやりなさい。正論だ。

橘
世間じゃ、山川総長は、千里眼を手品だと断じて排斥していると言われています。

山川
新聞が、私を大仇に仕立て上げたのだ。

橘
私のところは「真実」しか書いていませんよ。先生は終始、そう、まさしく科学的理性を以て、「否定も肯定も未だ判じ難し」と中立の立場を堅持していら

つしやる。学者の鑑です。しかし、しかしですよ。それでも追い出すんですね。学問の府から、福来さんを。

福来 酔っているのか。慎みなさい。

山川 まあ、いいから。

橘 嬉しいなあ。さすが太つ肚。一か月の地獄の籠城を生き抜いた白虎隊の生き残り。

福来 (はらはらして、山川に頭を下げる)

橘 「南北朝正閏論せいじゆん」しかり。誰が見ても、今上帝は、北朝の系統であらせられるのに、薩長の元老は、御一新のつじつま合わせで国定教科書をとうとう「南朝が正統である」と書き換えさせるってえじゃありませんか。

福来 いい加減にしたまえ！

橘 (構わず) 山県有朋元帥でしょう？桂首相なんぞは糸操りに過ぎない。(福来の制止を遮って) ま、ま、言いたいのは、その先さ。にもかかわらず、政治家軍人御用学者相手に、その誤りをただして一步も引かなかったのがこの山川先生です。なぜ。だって、「真実を曲げる訳にいかない」。そうおっしゃったんですよ、先生は。泣けましたねえ。教育界唯一の良心、そう思って、さすが真の侍、山川健二郎！と拍手喝采してたのに、この様さまだ。裏切られましたよ。……朝日の夏目さんの書いた通りだ。今のこの国は「悉く暗黒」です。「無理にも

福来

一等国になろうとして、精神の困憊、道徳の敗退、日本国中輝いているところは一寸四方もなし」。その通りですよ！

先生！山川先生も、御本心では、千里眼の研究は、亡国の学問だと、……そうお考えになっておられるのですか？

山川、言葉を搜す。窓を開け、雨の校内を眺める。

山川

私は、この国は一等国にならねばいけないと思っている。……たとえば、仮に今が、暗黒だとしてもだ。

山川の背中を見つめる福来と橘。

幕。あるいは、暗転。

第一幕

第五景 熊本・松合村。御船家の千鶴子の部屋。

スライド「同年十一月十七日、夕。熊本、松合村。御船家。」

幕が上がる。あるいは、舞台に明かりが入る。

漢方の療養所を営む御船家の、海を望む部屋。中庭に面し、濡れ縁。客席側に、八代海の穏やかな海を見る心。座布団、火鉢など適宜。

十一月だが温かく長閑な夕。潮騒。

二、三紙の新聞を畳に広げ、じっと見入っている千鶴子。玄関の方より女中、松乃の声。

松乃の声 ……お嬢様、お嬢様！福来先生がお着きになりました！お出迎えせんぞ！

お嬢様！

松乃 （開け）お嬢様！

千鶴子 え？

後から福来も顔を出す。

福来
ちーずさん、やあ。

千鶴子、初めて気づき、びっくり。

千鶴子
（叫び）先生！わあー！どして！いつ！うわあー、どうしまっしょう！松乃、
なして教えんと！意地悪！どうしまっしょう！

などと、うろたえているようで、はしやぐ千鶴子。新聞を慌てて
畳む。

秀益
（顔を出し）また、耳ん悪うなったとか？（福来へ）さ、奥（の部屋）へ、ど
うぞ。

千鶴子
先生！こちらへお入りになって下さい！（鞆を取って）私の部屋の方が、ほら、
海も見えて、気が晴れ晴れしますけん。ね、よろしかでしよう？

秀益
何じゃ、はしたなか。もう子供じゃなかぞ。

福来 (笑って) 私は、どこでも構いませんよ。

千鶴子 (父へ) そら、千鶴の勝ちばい。さ、先生、こっちへ入って下さい。松乃、いつまでお鞆お持たせしよつと。

松乃 (新聞をきちんと畳んでいつつ) はい、はい。

千鶴子は、甲斐甲斐しく帽子を受け取り、外套を脱がせる。松乃は、受け取り、出て行く。

秀益 先生までそう甘やかすものじゃから、ますます女王様じゃ。

千鶴子 なんね、先生の前で。

福来 ああ、明るくていいねえ、この部屋は。

秀益 こまか時分から、寝付くことの多か子でしたけん。ちつとでも日当たりのよか部屋をと思ひまして。

福来 (千鶴子へ) 耳……どうですか、この頃は。

千鶴子 (笑って) すんまつせん。私、一つことばじつと考えると、外ん音が聴こえんごとなるらしかつです。お出迎えもせじ申し訳ありまつせんでした。ほんなこて、はるばるようお出で下りました。(手をついて頭を下げる)

秀益 (一緒に礼を述べる)

福来 こちらこそ。いや、それならいいんだ。いつもの千鶴さんだ。（外を眺め）：

：しかし、本当に海ですか？まるで油をひいたように静かだねえ。

秀益 そりゃあ、入り組んだ内海うちうみですけん。こんあたりの船が皆ここで風待ちばした

つで、鉄道ん通るまでは、もつと賑わつとりました。また、ええ漁場ですけんの。

福来 そうでしょうねえ……。

千鶴子 （嬉しい）先生！

福来 はい？

千鶴子 先生！

福来 はい。

千鶴子 先生！

福来 はい！

松乃 （戻って二人を眺めていたが、我がことのように、つい）先生！

福来 はい。：え？

秀益 （呆れて）何ば言い合つとつとじや。

松乃 すんまつせん！

千鶴子 （松乃を袂で叩き）遠かつたでしょう？昨夜ゆうべん夜行ですか？

秀益 四国からじや。

千鶴子 ……四国？

福来 ああ。京大の今村さんと、岡山まで一緒だった。

千鶴子 (喜色が消え) もしかして、丸亀に行つとんなはって……。

福来 ?よく判つたねえ。

千鶴子 新聞にも沢山出とりましたもん。丸亀に新しい千里眼の女が現れたって。

福来 新聞の千里眼絡みの競争ぶりはすさまじいものがあるねえ。

秀益 うちも、秋の東京での実験で、大きゅう載せてもろてから、博多や大阪の新聞を送つてもらうごつしとるとです。

松乃 (茶の仕度などしつ) お嬢様、隅から隅まじ、毎日嘗むるごつ読んなはります。福来先生の名前ば捜して。

千鶴子 お黙り!

秀益 恥ずかしがる歳でもなかるうが。

千鶴子 どうせ出戻りたい。

福来 私のところにも、実験をしてやってくれという依頼が、(指折り) 秋田だろ、名古屋、尾道、大阪、……朝鮮からもあつたな。

秀益 (驚き) そぎゃん行かるつとですか?

福来 まさか。(笑つて) 行きやしませんよ。みんな千鶴さんの成功を新聞で読んで名乗り出た、俄か千里眼ですから。中には手品師や詐欺師もおるかもしれんが、大半は新聞におだてられてその気になった、暗示にかかり易い当たり前の人達

でしよう。千鶴さんのように、真実の力を發揮出来る人は、そうはおりません。そうですたい！お嬢様の千里眼は日本一ばい！

秀益 (大きく頷く) そうでしようとも。うん。うん。

千鶴子 ……ばって、丸亀の方は、ほんな千里眼だっただですな。先生がわざわざ行きなはったくらいですけん。

秀益 それもそぎやんな。で、どぎやんでしたか。

福来 間違いないでしょう、おそらく。今村君も同様の意見でした。

秀益 そぎやんですか……。 (大きく息をつき) 千鶴子も頑張らんばなあ。「各員一層奮励努力セヨ」じゃ。

福来 私がこちらへ回ったのも、そのことです。この上は是非とも、千鶴さんにもより様々な実験に協力して貰い、その能力の實際を、少しも早く詳らかにしたい。逸る心を抑えてやって参りました。ね、千鶴さん。

千鶴子 (頷く)

秀益 これはますます忙しゅうなるのう。先生、新聞の力は絶大ですぞ。東京より戻ってから、もう、小倉や鹿児島はもちろん、この間は、どぎやんしてでん千鶴子に病気ば見て欲しかていうて、富山から来た患者さんもおりました。朝から晩まで、千鶴子先生、千鶴子先生、ちゅうて、表の待合室は大漁の網ん中たです。

福来 (素直に喜べず) そうですか。それはそれは。(千鶴子の様子を見つつ) 千鶴

さんも丈夫な方ではないからなあ……。

秀益 みんな先生のお蔭ですたい。(頭を下げる)

福来 (思い至り) あれ、じゃ、今日は？

秀益 休みにしました。そりやあ、福来先生がおいでなさつとじゃけん当たり前です

たい。はい。

福来 そうですか、いや、それはまた痛み入ります。ご面倒をお掛けしました。

秀益 とつけもなか。

福来 そうかあ、千鶴さんが患者の病を透視しているところも、一度拝見させて頂きたいものだなあ。いや、いつか、うん、千鶴さんの気の向いた、ま、そのうち……でいいのですがね。

千鶴子 構いません。いつでんよかです。

福来 本当ですか！いや、それは有り難いなあ。

秀益 なんなら、先生も悪かところがなかか、見させますぞ。いかがです？

福来 (喜び) 私を？私の体を中を透視してくれるのかね？何だか妙な気分だねえ。

秀益 のう、千鶴。

千鶴子 (お茶を入れながら) 胃の下辺りが少し腫れておらるる他は、をにや丈夫か

です。お酒ば控えれば治るはずです。

福来 え？……いつの間に？

千鶴子 初めて熊本でお会いした時に。

福来 ああ、そう……。いや、いや、いや……。あ、そう。

と、この少し前に、一度部屋を出ていた松乃と、清原の明るいい声。

松乃の声 先生！もうお着きですばい！お嬢様んお部屋で……。

清原の声 そうか！いやあ、まいった、まいった。

清原、賑やかに入ってくる。外套や帽子を受け取りながら、松乃
続く。

清原 ごめん！先生！ご無沙汰でござります！（大仰に）本日はようこそ、こぎゃん
田舎の地までお運び下さって、恐れ入ります。

福来 こちらこそ邪魔になります。

清原 手ば振ったと気づきませんでしたかのう、先生のお乗りになった汽車に向か
って。

福来 いや、失敬失敬。八代海に見惚れておりました。

清原 眠かだけんつまらん景色でつしようが。東京ん人は判らんしらぬいのう。不知火でん出とれば別じゃがのう。

福来 おお、不知火ですかあ……。

清原 八月の一日の真夜中、旧暦ですばってん、あの、向ここのあたりに、狐火のごたる白か明かりの並ぶとです。

福来 景行天皇の道しるべとなったという話ですなあ。見てみたいなあ。……蜃気楼の一種でしょうかねえ。

松乃 あれは、死んだ人の御魂様です。お嬢様は、いつもそう言ってなはります。福来 え？……ああ、……そう。

千鶴子 こっちまで来たかっばってん、もう身体がのうなったけん、こっちにや来られん。御魂は哀しかつです。淋しそうに、じいっとこっちば見とるだけで。ただ、ここまでは来ましたよおー……ちゅう切な 생각이、白か炎のごつ見ゆつとです。私、ここで、あなたがたを見とりますよ、ちゃんとして……。

清原 (苦笑) また始めよった。(福来へ) 盆の御魂だったら、なすびやらきゅうりん馬に乗って、そこら中飛び回つとと違いますかのう。

福来 八月一日か。その頃また来て見たいなあ。

千鶴子 本当ですか？また来てやんになりますか？ほんなこて？

福来 あ、ああ、うん。何とか都合がつけばねえ。

千鶴子　　きっとですよ。あの、ここから不知火を見せて差し上げますけん。

清原　　まあ、よかけん、よかけん。先生、新しか実験ちゅうとは、今度はどぎゃん訓練ばすることになりますかのう。

福来　　はい。そのことです。さつそくですが……今度は写真乾板かんばんを使って、その中に写っている印や文字を透視してみてはどうかと……。 (などなど)

松乃は、清原の外套などを持って、去る。福来は、逸る心で、鞆から資料や機械を出しながらしゃべる。身を乗り出すように聞く
秀益と清原。千鶴子はどこか置いて行かれた気分だ。

秀益　　(清原へ) 福来先生は、丸亀から来なさったんじや。

清原　　おお、読みました。「新たな千里眼夫人、長尾……郁子！」
福来　　はい！早耳ですなあ、みんな。

清原　　それはもう。丸亀裁判所の判事の女房で、歳は……四十しじゅうじゃったかのう。地震や火事を予言して、ことごとく的中させたちゅうて大評判おおおじゃげな。

福来　　ええ。夫人を一目見ようと、家の前に人だかりがしていましたよ。
秀益　　おお……。

清原　　しかも、父様、立ち会い人と向かい合あひ合あわせたまま透視おうばするげなですばい。

秀益　ほんなこつですか、先生。

福来　はい。それには私も驚きましたよ。

秀益・清原　おお……。

松乃は、茶菓子か灰皿など持って出る。千鶴子は、「自分でやるから」とこなし、松乃は火鉢に炭を継ぐ。

清原　（秀益へ）その上、透視しとる時に、周りで世間話しとってん平気てったい。

秀益　おお……。

福来　確かに、私も今村さんと話していました。

秀益　おお……。

清原　やっぱ、気難しかっだらうね。

福来　それが、落ち着いた、堂々とした、いかにも徳山藩の家老の末という風情でした。

秀益・清原　おお……。

いきなり、「ガチャン！」と音を立てる千鶴子。

男たち
！（びっくり）

松乃
お嬢様？

千鶴子
（暈を睨んだまま）……どーせ、私は出戻りです。

秀益
……千鶴子。

千鶴子
……どーせ、私は耳が悪かったです。どーせ私の透視は後ろ向きです。どーせ私は、周りが静かにしてくれんと透視でけまつせん。どーせ私は気難しか女子です。どーせ私は……！どーせ私は……！（歯を食いしばる）

男たち、つい油断したことを、互いに目で責め合う。

千鶴子
……どーせ私は……千里眼です！

困惑する男たち。千鶴子は声もなく涙をこぼす。

清原
……どうした、そぎゃんむきんなって。

秀益
落ち着きなは！

清原
そうじゃ。先生の前ばい。女子らしゅう健気にせんと。

秀益
そん、丸亀の女子は女子。お前はお前じゃ。何も関わりやなか。

清原 そうたい。子供のこどもごたる嫉妬は慎まにやらんばい。第一、お前の力ば高う認

めておらるるけんこそ、先生もわざわざこうして汽車乗り継いで、こぎゃんと
ころまで来てやんなはつとぞ。

秀益 それもこれも、みんな千鶴のためばい。それをすねたごたる物言いしたら罰が
当たるぞ。

清原 ええか？ できれば試練と思うて精進し。人間ちゆうもんな、優勝劣敗の真理もとの下、
皆、死に物狂いで努力して進歩してゆくんじや。先生でちや、今村先生と仲良
しじやが、やつぱり終いには「千里眼の仕組みの発見者は福来友吉」じやと呼
ばれたかでしょうが、のう、先生。

福来 うむ、まあ、ねえ……。

清原 東京帝大の前の総長の加藤ちゆう偉か先生はの、人は生まれながらにして平等
じやいのは大嘘じやと書いておらるる。勝れた者もんが弱か者ば守り引っ張って
ゆく、それが当たり前ばい。お前は、選ばれた、勝つ側の人間なんばい！ しっ
かりせんといかんぞ！

千鶴子 ……。(じつと畳を見つめ、涙をこらえている)

福来 (優しく) お父様や清原君のおっしゃるとおりだ。私たちは皆、君の味方だ。
君の力を伸ばしたいと心から思う。君にはその力がある。それを信じているか
らこそ、私はここにいます。(丁寧) 私は、千鶴さんの中にある素晴らしい力

を、この目で、この手で、掴み出してあげたいんだ。判りますか？私は、隠されてる君自身も気づかないでいる本当の力をこの手で、この世界に顕現させたいのだ。

諄々と説く福来。

千鶴子

……なして？

福来

え？

千鶴子

何のために？……何のために、私の力が入り用なんですか？

福来

……それは、万民の未来のためです。

千鶴子

万民の未来の、何の役に立つとですか？

福来

万民の未来の、幸福のためです。

千鶴子

私の力は、万民を幸福にしますか？

福来

します。きっとします。

千鶴子

……嘘！

福来

嘘ではありません。

千鶴子

先生は大嘘つきです！

清原

千鶴子！なんちゅう口のきき方ばすつとか！お前ば世に出してやんなった大

恩人になんちゅう無礼だ！謝りなさい！

千鶴子 義兄さんも一緒です！みんな大嘘つきだ！

清原 こら、千鶴子、いい加減にせい！

千鶴子 こぎゃん私が、こぎゃん力で、未来の幸福なんか、みんな出まかせばい！出るわけなか！みんな一緒よ。みんなみんな嘘つきばかり！父様も嘘つきばい！

清原 この親不孝者！

思わず打つ。体育教師の清原は、すぐ手が出るのだ。福来が抱き着いて清原を制す。ずつとはらはら見守っていた松乃が、身を呈して千鶴子を守る。

福来 いかん、いかん！相手は女子ですぞ！

清原 こぎゃん了見の曲がった奴は、きちんと折檻せんばならんとです！

秀益 千鶴子！大丈夫か？おうおう、痛かったなあ……。

清原 父様がそぎゃんふうに猫かわいがりすっけんいかんとです。此の際、私が腐った性根ばたたき直してやります！

松乃 清原先生！いけん、いけん、やめて……！！

福来 (必死に) 待ちなさい!

秀益 猛雄君、折檻はいかん、折檻は堪忍してくれ!

清原 義理とはいえ、千鶴子は私の妹じゃ。千鶴子は私が千里眼にした女子です。そのために、かえって女子のくせにこぎゃん生意気になりおって、私が躡直してやりまっしょう! 松乃、どけ!

体力のある清原に、振り払われる福来。なおも組みつく。逃げ回る千鶴子を庇う松乃。

福来 君は、いやしくも教師だろうが!

清原 これは、兄が妹を躡けるとです! 邪魔立てせんで貰います。(手を振り上げる)

松乃 (後手に庇い) 叩くなら私を叩いてください!

清原 女中の分際で下つとれ!

千鶴子 (逃げ惑い) いや、いや、いや! 痛かとはいや!

清原 私の教育が間違っておったんじゃ!

千鶴子 そうよ! 私、好きで千里眼なんかになったつじやなか! なんして私にこぎゃん力をつけさせたっですか? なして、耳の悪か、ひ弱な、偏屈の千鶴子のままでおらせてくれんかったっです?

清原　なんとということば！さ、催眠術をかけてやった時、あぎゃん面白がって、心が

軽うなるとはしゃいでおったじゃなかか！

千鶴子　誰も、怖がって義兄さんの催眠術受くる人がおらんかったけんよ。

清原　何てや？

松乃　（又、後手に庇いながら）そうでした！そうでした！

千鶴子　ばってん、義兄さん、一人で一所懸命勉強しとった。東京の大学は行かれんか

ったけど、中学の舎監をやりながら、福来先生のご本、ぼろぼろになるまで読んでどった。私、義兄さんの喜ぶ顔が嬉しかった。「お前は千里眼だ、千里眼だ」って、百万遍繰り返す真剣さも嫌いじゃなかった。そう、私、嬉しかった。嫁入り先ば追い出され、松合におるだけで針のむしろで、嫌で嫌で一日中泣き暮らしとったっですもん。

松乃　お嬢様——！（泣く）

清原、興奮が冷め、皆も少し冷静になる。

秀益　（涙を拭いながら）そぎやんだった。そぎやんだった。

千鶴子　……ばってん、ほんなこて千里眼なんきやならるっちゃ思ったらんだったっですもん。

福来 「千里眼になった」のではなく、千里眼だったのが目覚めたのだ、正確にはね。

千鶴子 どっちでん同じこつです。義兄さんは、鼻高々で、それからすっかり変わってしもた。

清原 私が？何も変わっつとらんじゃなかか。

千鶴子 (首を振り) ううん。義兄さんも父様も、この家も村人たちも変わってしもた。私を、金の卵を産む鶏とでん思うたつよ。

清原 何を馬鹿な。

千鶴子 そんならば、三井合名からもろたお金、返して下さい。

清原 何を……何を今更言い出すんじゃ。

秀益 千鶴子、よう言うた！そうだ、あれをお前(清原)が持って行く理由なんかなかつじゃ！

千鶴子 お父様も返して！私に返して！あれは、私のもんでしょう？本当は！

秀益 な、なんじゃ？

秀益と清原、途端に気ままずい雰囲気になる。

福来 ……三井合名会社といえは……千鶴さんが以前、海の中の石炭の鉱脈を見つけ

たとかいう？

千鶴子
(頷く)

福来 やっぱりあれは本当の話だったのですか。いや、誰に聞いても、皆あまり話したがりなかつたものですから。

千鶴子 ばってん……二万円、もろうてしもつたつですもん。

福来 に、二万円！……二万円！……えええ！二万円！家が何軒建つだろう。

秀益 三池に匹敵する、それはえらい鉾脈げなですたい。それば、(清原を顎で指し) こん男が、半分奪^とつていきよつたつたい。

清原 奪つて？よう考えてものば言うて貰いまつしよう。もともと千鶴子に千里眼の力を教え込んだとは、私ですばい！あの透視力がなからんば、水の中の鉾脈なんか見つかる訳がなか。元々、あれは私がもろたもんばい！

秀益 ようもぬけぬけと。あれは千鶴子が礼にと貰つたもんじやなかか。それば義兄^{ぎけい}というだけで。

清原 義兄ですとも。だけん、やる必要もなかばつてん、半分父様へあげたつじやありまつせんか！立派な孝行息子でつしようが！

秀益 盗つ人猛々しか奴。先生の前じやと思うて遠慮しておれば、この獣^{けだもん}！先生！こげんして、この男は、これからも千鶴子の生き血を吸うつもりなんじや！

清原 千鶴子を甘やかして、こぎやん我が儘で破廉恥な女子にしてしまいいつたつは誰じや！あんたにやこの子は任せられまつせんぞ！

秀益と清原がつかみ合って罵り合う。福来も必死に止めるが、実驗物を壊されそうになり、それを守るのにも必死。千鶴子がいきなり、火鉢の鉄瓶を男たちの方へ投げ付ける。

千鶴子
やめて……！

「アチチ……！」悲鳴を上げる男たち。あわてて、かかった所を拭いたり、着物を脱いだりする。そうたいしたことはなかったよ。うだが、千鶴子の気違いじみた振る舞いに毒気を抜かれてしまう男たち。こうなった時の処置を熟知している松乃は、男たちに刺激しないようにこなす。

清原
何ちゆうことば……。

秀益
……ちずこ……。

福来
（二人へ）ここは、私が……ね、お二人は、どうか……。

清原
こん気違い奴が……。

腕などをさする清原を、押し出す福来。呆然と立ち尽くす秀益の、濡れた所を拭いてやり、

福来 さ……お父様も……。 (松乃へ) さ、あなたも、……。ね。

松乃 え？私は大丈夫ですけん。お嬢様、お可哀想に……。

ヨロヨロと去る秀益を送り出した福来は、残ろうとする松乃も出す。自失してうづくまる千鶴子。福来は静かに散乱したものを直しながら、

福来 (微笑して鉄瓶を拾い) よくやるの？……こういうの……。

千鶴子 (頷く)

福来 …… (片付けながら) 千鶴さんに透視をして貰って、お父様に薬を貰った患者さんね……嬉しかったと思いますよ。

千鶴子 ……え？

福来 身体を切ったり裂いたりしないで済んだんだもの。……幸せとは、そういうもの。素晴らしい力だ。

千鶴子 ……。

福来

晴れ渡った空の向こうに、怒涛の大嵐が待ち構えている。あるいは、今日のよ
うな穏やかな小春日和の明日、大きな地震が来る。……（微笑して）そういう
ことが判ったら、なんて素敵な人助けになるだろう。遠く離れた妻に、大陸の
戦地から、俺は大丈夫だ、心配するな、子供は元気か？と伝えられたら、どん
なに心安らかだろう。……そりゃあ、いろんな発見も、間違った使われ方をす
るかもしれない。だが、人類は進歩する。進歩する分、きつと幸せになる。科
学はそのためにあるのです。私たちは、少しづつ、より良い社会に向かって進
歩しているのです。……千鶴さんの力は、人々の未来の幸せに、必ず役に立つ
と私は信じています。

千鶴子

……丸亀の長尾さんって……私より強かですか？その力が……。

福来

さあ、まだ判らん。強いところもあるし、君の方が強いところもある。

千鶴子

先生。私もっともつと強くなれますか？

福来

もちろんだとも。

千鶴子

もつともつと進歩しますか？

福来

ええ。

千鶴子

長尾さんにも、そう言うたんですか？

福来

え？（笑って）言ったかもしれない。

千鶴子

私、もつともつと千里眼を鍛えます。もつともつと鍛えて下さい。

福来 はい。

千鶴子 私を、見捨てないで下さい。

福来 はい。

千鶴子 私が、先生を「千里眼の発見者」にして差し上げますから。

福来 はい。

千鶴子 本気です、先生、私。

福来 私もです。

千鶴子は福来にすがりつく。

潮騒。

千鶴子 私、ここが出たかあ……。

福来 そうですか……。

千鶴子 こん村は、割れた硝子……。綺麗かばってん、そこを裸足で歩いとるごたる……。

福来 うん。うん。でも、患者さんたち、がっかりするでしょうねえ、君がいなくなったら。

千鶴子 するでしょうねえ……。

福来 するでしょうねえ。

千鶴子　でも、どっつか、ここでなかところへ行きたかなあ……。先生んところはどぎ

やん？女中に雇って下はりまっせんか？

福来　うーん、そんなに広い家ではないんですよ。

千鶴子　なら、お妾さんでよかけん。

福来　お妾？……え？

千鶴子　（笑つて）嘘です。ばつて、淋しゅうなつたら、信号ば送りますね。そう、「レパシー」っていうとでしょ？

福来　そいつは妙案だ。うん、近ごろいい思いつきだ。

千鶴子　無線電信っていうと同じカラクリですか？

福来　（笑つて）無線はあくまで電波だよ。あ、つまり、電気の波だ。

千鶴子　波？電気でも？

福来　そうだね。目に見えないけど、例えば、そう、この鏡のような水面みなもに、君が一つ石を投げるとしよう。ポチャンと落ちた電気が、水の上を輪わになつて幾重いくえにも幾重にも広がって行く。無線もそんな感じかな。

千鶴子　聞いてくるる人がおらんところへもずっと？全部？

福来　水面すいめんを漣さざなみの輪がひろがつてゆくように、その一面全部に発信されるんだ。そうしないと、相手がどこにいるか判らないんだから。水の上ぜんぶに送る。

千鶴子　ふーん、おもしろかですなえ。

ようやく穏やかな思いで語り合う。

共通のイメージを膨らませ、楽しむ二人。

千鶴子 (急に立ち上がり) 「敵艦見ユトノ警報ニ接シ 聯合艦隊ハ直チニ出動 コレ

ヲ撃滅セントス 本日天気晴朗ナレド浪高シ」

福来 よく覚えているねえ。

千鶴子 日本人にっぽんなら、小学生でも知つとりますよ。

福来 日本海の三笠の小さな無線機から、その電信が海全部に波紋のようにサワサワ

サワサワ……と広がっていくんだ。どこまでも、聞いてくれる人がいてもいなくても、構わずどこまでも、波しぶきの上を水鳥のように駆け抜けていくんだ。

サワサワサワサワ……テンキセイロウナレドナミタカシ……テンキセイロウナレドナミタカシ……って。

千鶴子 先生も千里眼になればよかったい。

福来 私が？だめだよ、もともと勘が鈍くて、そういうの一番苦手なんだ。

千鶴子 なら、せめて漣のごたる私の言葉を聞き取って。

福来 受信だけでよいのか。それなら、ちよつと出来そうな気がしますよ。

千鶴子 ……そう、私が三笠。天いっぱい星が鏡ごつ映りこんだ不知火の海の上から、

本郷の、帝大の、夜遅うまで研究を続けておらるる福来先生の研究室へ送るの、心の漣を。……先生、才元氣デスカ？ 先生、研究ハ進ンデイマスカ。先生、千鶴ハトテモ淋シイデス。先生、千鶴ハ不知火ニナツテシマイソウデス。先生、千鶴ハ頑張りマス。千鶴ハ人間ノ未来ノ幸福ノタメニ、進歩シマス。先生 ガンバッテ下サイ。千鶴モ 一所懸命……。

潮騒。

寄り添う二人。各々の思い。

暗転。あるいは、幕。

第六景 丸亀。長尾家の座敷。

翌る明治四十四年正月八日。午前。

帽子を深くかぶり、マフラーで顔を隠すように客席に登場する福来。その行く手に待ち伏せしている橘。それに気づき逃げようとする福来。追いつかり取材する橘。

橘 先生！福来先生！

福来 (声を変え) あなた、人違いですよ。

橘 (帽子を取り) ひどいじゃありませんか。山川先生と結託して、抜け駆けの実験ですか？私と先生の仲じゃありませんか。

福来 ひどいのは君たち新聞の連中じゃないか。終わったらきちんと会見をするってあれだけ言っているのに、憶測と思ひ込みだけでよくまあ、あんなデタラメが書けますね。

橘 それ「事時」や「大毎」でしょ！あいつら取材費ないもんだから、長つ尻出来
ないんですよ。あることないこと、とりあえず記事にして送っちゃまうんです。

福来 それは報道ではなくて小説でしょ。

橘 紙一重ですね。

福来 みんな君の仲間じゃないか。

橘 「仲間」だったって、それ、「ウミウシの仲間」とかいう奴の「仲間」でしょ？
違いますよ！うちは、福来擁護派筆頭ですよ！現に先生の取材のためにわざわざ丸亀くんだりまで来てるんですよ！

福来 それは感謝している。

橘 やっぱ写真乾板かんばんに写した文字を透視させるんですか？
福来 ちよつと違う。

橘 二段抜きで、先生の手記を載せます！……三段抜き！

福来 手掛かりをあげましょう。頭の文字は「ね」です。

橘 「ね」？……ね……猫……鼠……。

福来 最後が「や」だ。しかも小さな「や」。「ね〇〇まるまるや」。判る？
橘 判りませんよ！

福来 「ね・ん・し・ゃ」。

橘 「ネンシヤ」？どう書くんです？

福来 「念じて写す」。それで「念写」。

橘 知らなかった。

福来 私の造語だ。

橘 え。

福来 心で強く念じた文字を、写真乾板に感光させる高度な実験です。

橘 この間発表された「京大光線」を使うんだ。

福来 馬鹿者！あんなインチキ論文、信じちゃだめですよ！だめ！だめ！だめ！

橘 でも、今村博士のお仲間でしょ？あの三浦って奴。「X線」や「ラジウム線」

なら判るけど、「京大光線」。最低な命名ですね。

福来 私は、ある種 of 精神作用から発せられる強いエネルギーで感光するのだと考えて

いる。

橘 成功すれば大発見ですね！

福来 し！

橘 え？（あたりを見回す）

福来 誰かに見られている……ような気がする。

橘 ……気のせいでしょ？

福来 君が実験の成功を願ってくれるように、失敗を望む連中もいるということだ。

橘 そりゃそうですね。先生に先を越されたら、困る研究者だって、あー、いるいる。

福来 千里眼を否定する新聞だって同じだ。今更鮮やかに成功されたらどうします。

真実を報道することが使命なんですよ、新聞は。

橘　嘘っぱちを書いたことになるのだから、信頼は失墜、読者は離れる。その分、

うちの売上が伸びる！

福来　そういう考え方しか出来んのかね！

舞台へ上がって行く福来。

橘　待って下さいよ、もう少し、何か……！

福来　（遮って）「福来光線」というのはどうかなあ。だめ？

橘　ええ？

スライド「翌る明治四十四年一月八日。午前。丸亀、長尾家」

福来は居所へ。橘は退場。

客間。正面は中庭に面した硝子窓。冬晴れ。

上手に長尾郁子が座り、後ろに夫の長尾与吉判事。下手に山川が向かい合って座し、その後ろに、福来、今村。山川は、半紙に「健」と揮毫している。

山川は、書き終えた紙を持ち上げ、一同へ示し、

山川 郁子さんには、この一文字を乾板へ念写して戴きます。御主人、よろしいです

な。

控えていた藤が、紙を郁子へ渡し、硯箱を片付けて下手へ去る。

与吉 山川先生のお名の一文字ひと。光栄でございます。郁子、心してつとめるようにな。

郁子 はい。今日は、この冬晴れの空のように心が冴えて、感じる気がとても強いように思います。(紙を見つめ) 立派に文字を写してお見せいたします。

一同、感嘆の息を漏らす。藤、実験用の乾板の入った木箱を恭しく持って戻り、中央に置き、控える。

山川 この木箱の中に、黒紙で三重に包んで完全に光を遮断している、未現像の乾板が入っています。

今村 今回の実験は、山川先生御自身がお持ちなされてはいかがでしょうか。

山川 私が？

今村

はい。

山川

(郁子へ) いかがでしような。

郁子

(微笑) お心のままに。ただ……。

山川

ただ？

郁子

山川先生ほどのお方に、種板たねいたをお持ちいただくのは、なんですか、随分おそれ
おおく感じますので、気後れきおくがするといけません。失敗すれば、私共長尾家の
不名誉でございますから、一所懸命念じますが、よろしかったら、福来先生、
山川先生の真後ろにお座りになってくださいませ。福来先生にも持っていた
いている心で念力を凝らしますので。

福来

(ためらい) 先生。

山川

構わんよ。奥さんの心に添うようにして差し上げなさい。

郁子

身に染みて嬉しゅうございます。

山川は木箱を膝に立てて郁子へ向ける。福来は座を移す。郁子は
「健」と書いた紙を目の前に持ち、じっと睨んでいたが、やがて

置き、

郁子

では。

今村がストップウォッチを押す。

郁子、目を瞑って念じ始める。見詰める一同。鳥の声しばし。

硝子戸のむこうにそつと橘が顔を出す。福来のみそれに気づき、顔で叱る。橘、ニヤリとしてそうつと消える。

眉間にしわを寄せ、苦しそうな郁子。目を見開き、箱を見つめる。

郁子 ……（立ち上がり）やめさせていただきます。

与吉 どうした？具合が悪いのか？

郁子 ……。（実験物を見つめている）

福来 どうしました？

郁子 ……何故、このような仕掛けをなさっておいのです？

山川 仕掛け？

郁子 いくら光を出して、健の字を押し付けようとしても、その箱の中には硝子板はありません。写真乾板なんて、全く入ってはおりません。ただ、眩い十字架か何か光っているだけです。いくら見ても、中は空です！

騒然とする一同。

山川 そんな馬鹿なことは断じてない。写真乾板は間違いなく入っている。今朝、私
がこの目で確認し、鞆に入れて慎重に運んで来たのだ。

郁子 光る十字架は何ですか？

山川 光る十字架？……ああ、あれは、外から、ラジウム線を与えて感光させようと
した時に判るようだ。

郁子 ラジウム線？なんです、それは？私がそのような得体の知れないもので、皆様
の目を欺こうとしているとお思いか。そうまでして、長尾郁子を手妻使いの詐
欺師に仕立てたいのですか！千里眼を発見なさりたいのか、カラクリの仕掛け
を暴きたいのか、どちらのご料簡か？ご立派なお方が、どうしてこのような、
お情けない……。

与吉 落ち着きなさい郁子。博士方の前です！

山川、慥然としたまま、布に包まれた木箱を開き始める。一同、
固唾を飲んで見つめる。木箱の中の鉛の十字架を出し、三重のボ
ール箱を開けると、中は空だ。一同、息を呑む。

山川

や……！ない！

郁子
なぜ、そのような。あんまり酷ひどいなさりようではございませんか……。

郁子は悔し涙で座込む。

藤は、そそくさと下手へ去る。呆然とする一同。福来たち集まってくる。郁子を慰める与吉。

山川
(どっかとあぐらを組み) 一体どういうことだ、これは！

今村
(箱を改めて、中の十字架を手にする) これは？

山川
藤君の発案でな。乾板の上下に一つをこう(手を交差し)斜めにしておけば、仮にラジウム光線が照射されても、感光の具合で、当てられた方向も判るからね。この箱は藤が入れたんで……(奥へ)藤！来たまえ！

今村
今、飛び出して行きました。宿に乾板を置き忘れたか、見に戻ったんじゃないでしょうか。

山川
あの馬鹿者！……くそ！

山川、郁子へ座り直すと、

山川
申し訳ない！藤のような粗忽者を使った私の罪です。奥さんには大変嫌な思い

をさせてしまった。長尾さん、健次郎、このとおり、お詫び申し上げる！

手について、深く頭を下げる山川。郁子、涙を抑え、改まり、

郁子

もったいない。どうぞ、もう、お手をお上げくださいませ。貴方様のような方に、そのようになさっていただいては、もったいのうございます。

与吉

手違いであったことが判れば、それでこれも安心でございますから。

山川

全く！是非、再実験を願います。

これより、次の景へ、ゆっくり道具替り始まる。

O・Lして、橘が登場。

橘

この実験の失敗は、山川博士と長尾家との話し合いで、世間には公表しないこととなった。そりゃあそうだ。実験以前の問題なのだから。ところが、藤と、「京大光線」の三浦は、その日のうちに、新聞にぶちまけやがったんだ。あることないことをね。

新聞記者A、登場。

A

(郵便局の窓口に言うように) 丸亀発。至急でお願いします。文面は、いいですか? 「(丁寧) 千里眼、化けの皮、剥がれる。」いい? 「郁子の手品、山川総長、看破す」。みる、やぶるでカンパ、判る?

橘

(驚愕) どうしてそうなるんだよ!

A

ええ? あんた誰?

橘、Aの胸倉を掴むと、新聞記者B、登場。

B

(自分の書いた記事を読みながら) 「長尾与吉判事は、玉川楼に宿泊中の山川博士を訪ね」……えーと、「写真乾板の紛失も、博士の鞆が勝手に開けられていたことも、みな長尾家の仕業であったと陳謝せり」。これでよし。

橘

よくねえ! そんなこと誰もしてねえぞ! こら! 手前、どこの社だ! 誰から聞いた!

B

誰からって、京大の三浦っていう……。

Bあわてて退場。橘、続く。入れ替わりに理学士、藤、登場。

繰り返し申し上げますが、私が、在京各社の方々に、ご多忙の中あえて御足労願ったのは、私の故なき冤罪を晴らさんが為、この一心であります。確かに私と関戸君は、互いに相手が入れたと思ひ込み、乾板を入れ忘れるという手落ちき多くの点が発見されたことは、縷々るるご説明いたしました通りであります。鞆が何者かによつて開けられていたことしかり。十字架の位置が動いていたことしかりであります。(やや、くだけ) だいたい、我々が丸亀に入る前、福来博士の実験において念写されたという「天照」あまてらす「観音」の二枚をご覧になるといい。噴飯物です。それらの文字を、紙形で切つて感光させた時と同じ特徴が現れているのが一目瞭然ですから。お判りでしょうか。「照る」という字も、「観音」の佳ふとりや「見る」「音」の字の中にも、四角の余白が幾つもありますね。一番単純な例で言えば、「口」という字。これを紙で切り抜こうとすると、字の線はどこか開けて、外と中をつなげておかないとまずいでしょ？中の白い部分が抜け落ちてしまいますからね。つまり、線のどこかを切つて、外と中の余白をつなげておかなければ成立しない。長尾夫人の念写した「天照」「観音」の二文字をよく見ると、全てその特徴を有しておるのであります。これらのことを鑑みますと、自ずから夫人の千里眼なる能力がいかなる代物か、多弁を弄せずとも、推してはかれるというものではありませんか？いかがです？

同時並行して、ゆっくり人物は退場する。
藤も退場。

第七景 再び、熊本、御船家。

一月十八日。夜。

スライド「一月十八日。夜。熊本、御船家。」

千鶴子が綿入れを着て、縁側に腰掛け、少女のように星を眺めている。

潮騒。汽笛。松乃、静かに出て、千鶴子にマフラーなどさし出す。

松乃 お嬢様。風邪をひきます。

千鶴子 (答えず)

松乃、傍に置いて、炭を継いで火鉢を千鶴子に寄せて、去る。
庭の方から、橘が現れる。

橘 (帽子を取り) ご無沙汰しています。

千鶴子 橘さん！なして、今時分！

橘 熊本から。

千鶴子 寒かでしょう、上がって下さい。玄関はこっちですけん。（と、案内しようとする）

橘 ああ、ここでいいです。すぐお暇しますから。去年、熊本でも三人引つ張られましたでしょ、大逆事件で。

千鶴子 ええ、ええ。大騒ぎでした。あの時分は、市内の清原の診療所を手伝ってた時ですけん。

橘 そう。「熊本評論」て本を出して、まんざら知らない連中でもなかったの、その後、ご家族なんかどうしてるかって、うちの社主が仏心を出しましてね。まあ、お知り合いでしたと……。

橘 「大逆事件」ってひとくくりになされてるけど、どう考えても、とぼっちりですよ。社会主義運動を圧殺するための、スケープゴートです。

千鶴子 スケープゴートって？

橘 あ、生け贄のことです。生け贄の羊。

千鶴子 そんなら、私と同じですね。（お茶を入れ始める）

橘 ……新聞……お読みになりましたね。

千鶴子 山川先生も、もう二度と乗り出しちゃこられんでっしょ。「千里眼の正体現わる」「千里眼は存在せず」「千里眼は手品と判明」「千里眼は研究の値なし」「千

里眼の詭術きじゆつはげる」「千里眼は……」

橘

もう、いいですよ！あれは、藤という奴が、手前のしくじりを柵に上げ、保身の為に新聞記者に吹き込んだことですよ。丸亀にいた俺たちは、よってたかって藤を責めたもんだから、野郎、高跳びしやがって、東京で会見を開いたんだ。

千鶴子

故意わざとでしょう？初めから乾板なんか入れちやなかつたつでしょう？長尾郁子さんが念じ込みましたつて言うたら、箱は空っぽだつて大恥ばかかするつもりだつたつでしょう？

橘

違いますよ。断じて違う！いや、やつたかな、あいつのことだから。でも少なくとも、山川先生は知らなかつたと思う。

千鶴子

言い切れますか？

橘

山川さんは、そんな姑息なことをやる人間じゃない。それは断言できる。立派な侍です。千里眼を否定するなら、きちんと、明々白々な手段でやる人です。

千鶴子

あの藤ちゆう男が、一人で勝手に考えたつて、橘さんは、そう？

橘

仲間もいる筈です。手柄が欲しかつたんですよ。あいつはね、独自の実験をしたがつていたのですけど、長尾家が嫌がつて一度ならず断つていたんです。千鶴子さんなら判りますよね。ちよつと新聞に載ると、途端に胡散臭い得体の知れない学者や名士が、蟻のようにどこからともなく集まつて来るでしょう？そんな連中、いちいち対応出来んでしょう。困つた藤の奴は、福来先生に同席を

頼んで、それも断られた。万事休して、どんなつてを使ったか、山川さんの実験助手にもぐり込んだって訳さ。山川さんも迂闊だったよなあ。藤は「報知」の金で丸亀に来てたんですよ。だから、実験に参加出来なくちゃ面目丸つぶれ。焦ってたんです。

千鶴子

初めから、郁子さんに恥ばかかするつもりで？

橘

長尾家にも、福来さんにも、恨みを持っていたのは本当だな。

千鶴子

そぎやんとしても……、なして？私には判らんとです。

橘

……（次の言葉を待つ）

千鶴子

判らんと。なんしてか。ねえ、橘さん、教えて！どうしてみんな、誰も彼も、手品だ、いかさまだ、詐欺に違いなかって決めつけると？目の前で見たことも、実験したこともなかとに、どうしてそぎやんことが決めつけらるって言うんです？

橘

それが世間つてもものだ。

千鶴子

あなたの仲間が書いたことじゃありませんか！

橘

仲間じゃないって。

千鶴子

新聞が、こんまか嘘を、どんだん、どんだん膨らませて、化け物んごととして、放り出すとよ。そぎやん大嘘の化け物はもんが、この国の人ん心をどんだん、どんだん食いく尽くすと。食うて食うて、飽くると吐いて、また別の嘘を食うて。元の、

橘

ほんなこつこのことの根つこがのうなるまで食い尽くすと。……橘さん、あなたたちの生んだ化け物よ……。

判る。判るよ。俺が謝ることでもないけど、責任は感じているんだ。ただ、千鶴子さん、ここんとは肝心のところなんだ、信じて欲しいんだけど、俺は千鶴子さんも福来さんも信じているってことだけはね。俺の記事読んだ？ 十二日付けの一面。まだ、こつちには来てないか。（鞆から出して示し）ほら、これ、ここ読んで下さいよ。（と、言いながら、自分で）「丸亀なる、千里眼婦人に対する山川博士の実験は、学術上に大いなる価値あるべきものにして、上一般人士の、熱心なる注意を集めいたるが、実験者側の行き違いのため、中止に至るは、「ここ、ここ見て下さいよ、「大いなる痛恨事、大いなる損失というべし」ね。痛恨事、損失ってはつきり嘆いてるでしょ？ 藤の野郎のことも、「制裁するべし」って、ちゃんと書いてある。しかも、「ただ一点、千里眼婦人が箱の中の乾板の存在せざることを透視し得たるにおいては、婦人の能力の、なお無瑕きずにして、今後再び実験せらるべき価値の充分なることは、社会一般が認むるところなるべし」ね！（押し付けて）新聞記者だつてこういうのもいるんだから！

千鶴子

（記事を眺めながら）……翌日の実験じゃ、実験鞆ば盗まれて、「殺すぞ」ちゆう文も届いたとですって？

橘 …… そうなんだよ。

千鶴子 お気の毒つかねえ……。郁子さんも、もう二度と実験はしなはらんでっしょ。

橘 一体誰がそんなことまでするのかなあ……。

千鶴子 (冷静さを取り戻し、新聞を読み返しつつ) …… 言いなはらんどですか？それが世間だつて。

橘 …… それが…… 世間か……。

千鶴子 今日、子供たちに石ば投げ付けられました。

橘 え？ どうして！

千鶴子 どうしてですか。「ヤーイ、ヤーイ、ラジウム女」って。

橘 ラジウム女？ラジウムの何たるかも知らねえくせに。ひでえなあ。

千鶴子 私も知りません。知らんでよかとですよ。どぎゃん、科学とか、進化とか、優勝劣敗とか言われても、私たちは、電信のからくりすらよう判りまつせんもん。これから、どんどん判らんものが外国から入つて来るとでしようねえ。飛行機つちゆうもんも、なして鉄や木が人間を乗せて飛ぶとか判りまつせんもん。これからは、中身の判らんもんばかりに囲まれて、暮らすごつなるとですねえ。何も考えずに。この国の人間は、何も考えん人間ばかりになる。

橘 言えるな……。

千鶴子 ですけん、せめて福来先生には、千里眼の仕組みば解き明かして欲しかった。

橘
まったくくだなあ。

千鶴子、ふと立ち上がる。

千鶴子
流れ星。

橘
……恐いくらいの星だなあ。夜の海に映って、鏡のように海の底へも続いている。
千鶴子
世界に、私たち二人だけしかおらんごたる……。

各々に星と海を見つめる二人。潮騒。

千鶴子
……熊本まで新聞一部配達にこらした訳じゃなかでしょう？

橘
(頷き) へへ。どうしても気にかかりましてね、あなたのことが。丸亀の郁子さんのように守ってくれる夫がいる訳でもないし。あれだけ書かれると、その、かなり辛いんじゃないかと……そう……。

千鶴子
それでわざわざ？

橘
あなたは、何というか、ほうっておけない気にさせるんですよ、男を。多分、福来先生も感じている筈ですよ、きっと……。

千鶴子
私が……千里眼だけん？

橘 多分違います。

千鶴子 弱かけん？

橘 うーん、……それもちよつとなあ……。

千鶴子 ……不幸せだけん。

橘 (微笑して) 判りません！へへへ、新聞一通の配達に熊本まで。いいじゃありませんか、ローマンチックで。

千鶴子 ……不幸せだけん。

橘 ……不幸せだけん。

千鶴子 ……不幸せだけん。

千鶴子は、奥から小箱を持って出る。開けて見せる。

橘 花火？

千鶴子 線香花火です。大好きとです。冬はいけまつせんか？

橘 いや……そんな決まりはないし……。いいね。

千鶴子 はい！

蠟燭を灯し、はしやぎながら。パチ。パチ線香花火にしばし興じる二人。

橘 ……俺、信じてなかったんですよ、本当は。

千鶴子 え？……なにを？

橘 千里眼をですよ。

千鶴子 ……そう。

橘 疑っていた訳じゃないけど、どちらでもよかったのかな。

千鶴子 本物でも、贋物でも？

橘 何というか、「虫の知らせ」とか「勘のいい奴」とかが存在するのは判る。信じている。ただ、念写までいくと、ちよつと腰が引けるといふか……。でも福来先生の情熱を見ているうちに、俺も本当のことが知りたくなつた。あの人の、気違いじみた千里眼への情熱に感染したらしい。今では、信じています。あなたも、千里眼も。

千鶴子は、じつと橘の目を見つめている。視線を外して、花火をする橘。

千鶴子 ……福来先生がね、いつかおっしゃつてました。

橘 なんと。

千鶴子 「信じる」ちゆう言葉は、本来、科学にはあつちやならんとして。

橘 ？……ほんとかなあ、それ。

千鶴子 科学には、「ある」か「ない」かしかなかつて。

橘 ……（釈然としない）何となく、判るような気もするけどね……。

千鶴子 ……私も、福来先生の為だけです。こぎゃん頑張っておらるつとも。

橘 お父様も、清原さんもいるじゃありませんか。

千鶴子 （ちよつと切なそうに微笑し）……こぎゃんこつを言うんですよ、二人とも……。

橘 なんて？

千鶴子 （花火を見つめつつ）インチキでん何でんよかけん、的中させろつて。

橘 ……え？

千鶴子 的中出けんだったら、学者先生たちの汽車代や宿代もみんな払わせらるつとだけん。

橘 （立ち上がり）そんな馬鹿な！

千鶴子 橘さんも、本当に信じとんなはったですか？私んこと。

橘 え？

千鶴子 （ちよつとくすくす笑つて）案外、無邪気んごたるねえ。

橘 どういうこと？

千鶴子 ばってん……時々手品んごたることもしましたばい。

橘 ……まさか。

千鶴子 (無邪気に) どうしてん見えん時は、鉄瓶の湯気で封じ目をはがしたり、元ん

とおり戻したり、とってん早かったですよ、私。とってん上手に出くるごつなり
ました。

橘 ……嘘でしょう？千鶴子さん、どうしたんだ急に。……やめて下さいよ。

千鶴子 私、もう、人を騙し続くとが嫌になつてしもたつです。最後まで信じてくれ

とつた人を騙すなんて、ね……少し……。胸ん痛かです。

橘 ちよつと……ちよつと待つてくれよ。……俺は、夢を見ているのか？幻聴なら、

このまま気が違つてくれた方がましだぞ……。もちろん嘘なんでしょう？千鶴
子さん！

千鶴子 (いたずらっぽくほほ笑み) はい。

橘 どっちなんだい？嘘だよな！

千鶴子 はい。

橘 からかうのはよしてくれ！嘘だよね！

千鶴子 はい。

橘 やめてくれ！どっちなんだ！……やっぱり、本当なのか、今、言ったこと。

千鶴子 ……はい。

橘 (肩を掴み) やめろと言ってるんだ！

疑心暗鬼で混乱する橘。千鶴子、淋しそうにほほ笑んで夜空を見る。

橘 たちの悪い冗談だつて言ってくれ。

千鶴子 (明るく笑い出し) はい。

橘 いい加減にしろ!

千鶴子 ……つて、そぎゃんことを言い出したなら、どうしなはりますか?

橘 え? ……やっぱりからかったのか?

千鶴子 いいえ。

橘 どっちなんだ!

千鶴子 私を信じてくるるつて言いなりました。

橘 (頭を抑え) ああ、言った……。

千鶴子 橘さんの「信じている」つて、こんくらいのものですたい。

橘 え?

千鶴子 信じている……素敵な言葉。ばってん、私にはとつてん酷か言葉。

橘 ……試してたのか?

千鶴子 (首を振り) ううん。判つて欲しかつただけ。

橘 何を!

千鶴子 あなたの「信じる」ちゆう言葉の意味を。あなたの「信じる」は、そんなら

橘

いのもんだっちゅうことを……。
(がくりと) 勘弁してくれ……。

力無く座込む橘。

千鶴子

沢山の人が、沢山の「信じている」を下はりました。この星ほども。ばってん、本当に信じて下さったとは……福来先生だけでした。私は、ずっと、松合の人達のために、ちつとでん役に立てる女になろうって、そればかり夢中でやって来ました。そしたら、あの方がやって来なはって、心ん底から、私に生きる甲斐ば示してやんなった。私はもう、出戻りの、耳の悪か、癩性の、気難しか千鶴でのうてよかった。こん村ん外でも生きていかるっただって……。ばってん、それは思い違いでした。東京に着いてから、みんな、手品のタネば暴こうと見るとです。「おい、お前は人に見ゆるが、本当は猿だろう。赤か尻を出して見せろ」そう言うて檻に閉じ込め、棒でつき回すとです。山川さんでちやそう。人に似た何か新しか片輪の生き物を発見したごつ。誰も私を人とは信じてくれとらんだったっ！福来先生以外は……！

狂気の子兆。目を見開く千鶴子。啞然と聞く、橘。

千鶴子 ……長尾郁子さんは、死にます。もう長うはなかよ。

橘 ……どうして？

千鶴子 肺の片方が濁つとるもん。とても悪かごたる。

橘 それは…透視？予知なのかい？

千鶴子 判りまつせん。以前から、うちの療養所に来られん遠くの岬のかたば診たことがありました。今日は、郁子さんが、私には見えませんでした。

橘 ……。

千鶴子 信じて下さらんで構いまつせん。…千里眼は、信じて下さる人のためだけにあつとですけん。

千鶴子、東の星空に向かって叫ぶ。

千鶴子 先生！聞こえとりますか！今夜も千鶴子の心の通信ば送ります！天気晴朗ナ

レド浪高シ。天気晴朗ナレド浪高シ。…あ！三笠のマストに乙旗が掲げられ

ました！皇国ノ興廢コノ一戦ニアリ 各員一層奮励努力セヨ！先生！ごめんなさい！一層奮励努力しましたけど、千鶴はちつとも上達しまつせんでした！

千鶴は負けっぱなしです！本当に負けっぱなしなんです！先生、ごめんなさ

い！……あ！また流れ星……！先生！今夜は届きますか？先生……！

躁病的な千鶴子。見つめる橘。

暗転。

第八景 三度、福来の研究室。

第四景のしばらく後。暮れ方。

山川は、大机の椅子に座り、大分酔いの廻った橘は、床に座込んでいる。福来も、壁に寄りかかって話を聞いていた。

橘

……その翌る晩でしたよ。彼女が重クロム酸カリを飲んで死んだのは。

山川は、静かに酒を口に運んでいる。

橘

電報で、東京に長い記事を送ったけど、同じ日に幸徳さんたちの死刑判決が出て……それどころじゃなかった。……千鶴さんね、砕けた硝子の上を、裸足で歩いているみたいだって、……そう言ってたでしょ？……思い浮かべてみて下さいよ。熊本の片田舎で、街灯もない暗い町の……、潮騒しか聞こえない寝静まった夜、あの部屋で、ランプの下、一人でじっと目を瞑って透視の稽古をしている姿を。……彼女、何遍も言っていましたよ。「この頃、出来ない、出来ない。先生に申し訳ない」って……。あんたが長尾郁子の実験で頭が一杯だった

時さ。

思わず顔を覆い、嗚咽する福来。橘も涙声だ。

橘

そうして、一カ月後。肺炎で郁子さんも死んだ。……「的中！」だ。……千里
眼の記事も、もう載せてもらえなくなった。

橘も涙を堪える。

山川

……私はね、無理を承知で、この国は一等国にならないといかんと思っている。
今の怒涛のごとき西洋文化の流入を見たまえ。玉も石も混沌のまま、うなり
を上げて降りかかってくる。これまでのように、西洋を見習い学ぶだけで精一
杯だった時はいつそ幸せだった。未曾有の嵐が、これから幾度も我々に襲いか
かって来るだろう。そのために、己で考え、己で立つ、本当の日本人が育つこ
とが急務なのだ。国は一つにならねばならない。……そのためには、国民を惑
わす、無知、偏見、誤謬、迷信は悉く撲滅せねばならないのだ。福来君と（橘
へ）新聞は、千里眼事件において、国民に過激な迷信熱を招いてしまった。こ
れは事実だ。

橘
しかし、それは……！

山川
君たち、新聞屋が、煽るだけ煽って、面白おかしく千里眼の物語をでっち上げたことも、事実だ！日露戦争が終わって、景気はどん底だ。戦地からの報道の早さを競って、電信だ、海外支社だと、湯水のように金をつぎ込み、今ではこの新聞社も借金まみれではないか。部数を伸ばすためだったら、派手な事件をでっち上げることも厭わなかったろう？君たち新聞社は、事件を捜したのではなく、事件を作ってまわったのだ！

橘
その通りです！まさに、おっしゃる通りですよ！そして、国民は、その物語に乗った。

福来
我々科学者もだ……。

橘
それも、積極的に！新しい光線の第一発見者の栄誉を掴むために。我先にだ！X線のような、未知の光線や新元素の発見にみんな血眼だった！同罪でしょ？新元素のポロニウムは、ポーランドでしたっけ？ゲルマニウムはゲルマンだ。フランシウム、アメリカシウム……みんな自国の名前をつけて、世界に覇を唱えようと競い合う。山川さんだって、千里眼の実験で、新発見の成果を手に、世界に躍りだしたかったのでしょうか？ニッポン光線とでも名付けてね！そうでもなきやあ、山川先生ほどのお方が、千里眼なんて際物に乗り出して来るはずがなかったんだ！そうじゃありませんか！

山川 科学者ならば、誰だって未開の発見を志すものだ！

橘 俺から見たら二人とも、一番槍の功名を競うばかりに、互いの足を引っ張り合って、結局、掌中の珠を取り落としまつた大間抜けですよ。二人を殺したのは、俺たちだけじゃない！山川さん、あんたも、同罪だぜ！……今村さんだって、同じこつたい。

山川 ……京大の今村君か。彼もまだ？

福来 (首を振り)彼の伯父上は、辻新次男爵ですから。

山川 帝国教育会会長の……。なるほど。

橘 (笑い出し)福来先生、大分コンプレックスって奴を感じてたでしょ。

福来 (微笑するのみ)

橘 お父っあんは、一高の校長で、三つ下なのに、ドイツやオーストリアに三年近く留学してたんですよね。……京大組から、東大の福来とは手を切れて随分脅されましたよ。

福来 (頷いて)察していたよ。

橘 (ふと思いつき、酒を注ぎながら)今村さんの男泣きつてご覧になったことあります？

山川 いいや。

橘 あの藤ってお調子者が、長尾郁子の念写は手品だって吹きまくった時、郁子さ

んが新聞に声明を出したでしょ。「藤さんと差し向かいで実験をやるから、呼んで来て下さい。負けた方がそこで見事腹を切ることにしましょう」って、家宝の懐剣まで出して見せた時ですよ。そこまで命懸けでやって来ていたのに申し訳ないって、あのお坊ちゃま博士が、無念だってオイオイ。

……そうか。

（山川へ食いつきそうに）あんたは、落城まで会津の城で闘い抜いた侍の中の侍だ。胸、痛みませんか？女でもそこまで命懸けだったんですよ。彼女は千鶴子さんみたいに金に縛られてもいなかった。無償ですよ。ただ、科学の進歩のためだけに、文字通り命を削ったんです！そんな女が、実験でイカサマやると思いますか？

山川

……それは確かに、君の言葉が真実だろう。

橘

だったら、福来さんの研究、まだまだ続けさせてやったらどうですか！

福来

（橘に掴みかかり）橘君！

橘

帝国大学の助教授から、ただの拵鉢坊主に落っこちてしまうんですよ！（福来

へ）頼むからもつと怒れよ、あんたも！

福来

（思わず殴り）先生だって、判って下すっているんだ！

橘

判ってたら、退官なんてさせるか！この大馬鹿野郎！

犬のように殴り合う二人。やがて、治まるのを見つめ、山川は決意を込め、

山川

……人間は、貧乏なだけでは戦争は起こさない。戦争を起こすのは、無知と偏見からだ。……私たちが会津の者は、半世紀の長きにわたって、悲惨という悲惨、無間の地獄、辛酸の極みをなめ尽くしてきた。それも「会津は賊軍」という無知と偏見のためだ。我が容保公は、亡き孝明帝の御親翰を終生傍近く離さずにおかれた真に尊王のお方だった。にも拘わらず、だ。……私は、無知と偏見を心から憎む。敗軍の十五歳の少年を、雪の会津から逃がし、新潟でかくまってくれた長州の奥平先生、官費で留学をさせてくれた薩摩の黒田伯爵。偏見のない多くの恩人によって、今の私がここにある。無知と偏見を失するには教育をおいてはない。国を支えるのは一に教育の充実をもってしかありえない。迷信、誤謬という偏見の基は、断じてこれを恕してはならないのだ。

橘

しかし、しかしですよ。千里眼という、見えない未知の力の解明は、科学の責務でしょう。燕が過たず海を渡って来るのを調べるように、人間の未知の力も調べてくださいよ。大学を放り出された千里眼は、野放しのまま、やがて巨大な迷信の化け物に変化しますよ。それこそ、無知と偏見の温床となって、五十年先、百年先の国民を蝕みますよ！数学や工学ばかり達者でも、科学と迷信の

区別もつかない片輪のような若者が育ちますよ！それでもいいんですか！

山川 ……私も残念だということは判っていてほしい。……福来君。野にあつても科学の心を忘れんでいてくれることを祈るよ。

福来 (微笑) 科学の門を閉ざされた私には、宗教という憐れみの袖にすがるしかないかもしれません。

山川 ……そうか。(残念そうに頷く。気を変えて) 橘君、これから国の学問では、千里眼などを取り上げることはないだろう。いずれ、正式な発表があるだろう。その時は……。

山川、福来と握手をして、橘の方を見る。橘はポケットに手を突っ込んだまま動かない。

橘 (山川の背中へ) 山川さん。あんた、また、負け戦ですね。

山川 ……生き残るということは、……こういうことだ。

山川、去る。深く頭を下げて送る福来。

橘 (扉を蹴り) 誰が科学を捨てさせたんだよ！…… (乱暴に窓を開け) やまねえ

かなあ、この雨。……先生、心靈主義とか、そっちへ行くのだけは勘弁して下さいよ。

福来

(酒をぐつとあおり) ……堪忍してくれたまえ。

橘

スピリチュアリズム。……本気ですか？

かすかな潮騒。福来、夢見るように耳を傾け始める。

橘

……先生？酔ってますね？大丈夫ですか？

福来

……ああ、酔った。久しぶりに……なんだか愉快的気分だ。……スピリチュアリズムの定義を覚えているかね？

橘

はい。……一つ、人間の魂は、死後も存在する。二つ、死者と生者との交信は

可能である。

福来

それが真実なら、私は千鶴子さんと交信出来る訳だ。

橘

やめて下さいよ！先生までそっちへ行っちゃって、本当の解明は誰がやるって

いうんですか！山川さんは、国民教育の為に、千里眼を迷信とひとくくりに出してしまっ、頼みの綱の福来先生は、宗教に逃げ込んじゃって、なんてこつたい！あんたたちの神は、「科学」じゃなかったのかよー！

道具がゆっくり透け始める。……潮騒。

その向こうは、あの夜の満天の星と、それを映す鏡のような海だ。

福来

……不知火の海だ。

橘

先生、そっちへ行っちゃだめだ！俺と一緒に、千里眼の物語を書きましよう！科学的に、理性的に、私たちの心に住む、虫の知らせや第六感の本当の仕組みを。燕のように、人間にも未知の素晴らしい力があつて、それが、未来の子たちに幸せをもたらす力だと証明するんです！野放しになって、化け物に育ってしまった、偏見や無知や迷信を、残らず退治するんです！

道具が中央より割れて行く。

ゆっくりとそちらへ歩み始める福来。

橘

千里眼を野放しにしても、本当にいいんですか！先生……先生……先生……先生！先生、……そんなに千鶴さんの声が、聞きたかったんですか！

福来

(微笑し)……三年待っているんだ。そろそろ、恕してくれないかな、千鶴さんも……。

福来、静かに天を仰ぎ、耳を澄ませる。

照明、福来に絞られる。

潮騒。

福来

千鶴さん！聞こえますか？ 千鶴さん、お元気ですか？ 私は、千鶴さんを見習って、心の波を送ります！ 日本海を渡る三笠の無線電信のように！ 天気晴朗ナレド浪高シ！ 聞こえますか！ 天気晴朗ナレド浪高シ！ ……天気晴朗ナレド浪高シ……！

福来の絞り出すような絶叫が、虚空に放たれていく。

満天の星の中に、ほうり出されたような福来。

ゆっくり暗転、あるいは幕。